

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

# 紀要 2005



2007年3月  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表面) 津島岡大通跡第17次調查（創立五十周年記念版）周辺

墓地の「第十七番（17）」大野石新ブレート

(裏面) 津島岡大通跡第17次調査（昭和理工学院）出土の墓碑

（昭文時代後期）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2005

2007年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 序

岡山大学の構内には、埋蔵文化財とともに、明治期以降の近代化遺産が多くござります。津島地区が旧陸軍第十七師団司令部等の跡地であり、鹿田地区も本学医学部の前身であった旧岡山医科大学の校地であったことを思えば当然のこととあります。岡山県教育委員会が2005（平成17）年に刊行した『岡山県の近代化遺産』には、津島地区・鹿田地区のそれぞれで11件、本学関係全体で計22件の近代化遺産があげられております。これらのうち、旧陸軍第十七師団司令部衛兵所（現岡山大学情報展示室）と旧岡山医科大学門衛所・正門（現岡山大学医学部門衛所・正門）の3施設については、2006（平成18）年12月開催の文化審議会が登録有形文化財（建造物）に登録すべきものとして答申したところです。

本埋蔵文化財調査研究センターは、こうした近代化遺産を直接調査・研究業務の対象としているわけではありませんが、建造物が崩壊し遺跡となりつつある施設についてはできるだけ現状を記録しておくこととし、1997（平成9）年度には旧陸軍工兵第十聯隊将校集会所の庭園とそれを取り囲む土壘の測量調査を実施しました。これに続くものとして2005（平成17）年度は、文学部・法学部・経済学部1号館西方において倒壊・大破した橋脚が上に埋もれつつある旧陸軍工兵第十聯隊橋梁演習施設の実測調査をおこないました。本紀要にはその調査報告とともに、本学構内と周辺地域における旧陸軍関連施設の現状を概観したレポートをあわせて掲載しています。

2006（平成18）年秋、本センターが恒例の『キャンパス発掘成果展』を移築保存された旧陸軍司令部庁舎（旧事務局棟）ロビーで開催したところ例年以上の入場者があり、近代化遺産にたいする市民の関心の深さがうかがわれました。本紀要が本学内外におけるそうした関心にいくらかでもこたえることができれば幸いであり、積極的な活用をお願いする次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長）

梶原憲次

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

稻田孝司

# 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005

## 目 次

### 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 測量調査の概要	1
1. 旧陸軍工兵第十隊橋梁演習施設の測量調査	(中村大介) 1
第2節 立会調査の概要	4
1. 調査の実施状況	(野崎貴博) 4
2. ブール改修（排水管改修）工事に伴う立会調査	4
3. キヤンバス環境整備（門扉改修等）工事に伴う立会調査	(中村) 7
第3節 津島岡大遺跡の研究	11
1. 津島地区とその周辺の陸軍関連施設について	(野崎) 11

### 第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 立会調査の概要	22
1. 調査の実施状況	(野崎) 22
2. 医学部変電所ビット周辺高圧ケーブル設置工事に伴う立会調査	22
第2節 鹿田遺跡の研究	25
1. 鹿田遺跡の古代・中世の井戸について	(中村) 25

### 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理	(野崎) 30
1. 調査資料の整理	30
2. 調査資料の分析	30
3. 調査資料の保存処理	31
第2節 調査資料の公開・活用	(光本順) 31
1. 公開・展示	31
2. 資料・施設等の利活用	33
第3節 2005年度調査研究員の個別研究活動	34
1. 科学研究費採択状況	34
2. 論文・資料報告	34
3. 研究発表等	35
4. 資料収集・実態調査	35

### 第4章 2005年度における調査・研究のまとめ

(野崎) 36

## 付 編

### 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	37
2. 2005年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	39
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項	39

## 挿 図 目 次

第1章	
図1 機械演習施設の位置	1
図2 機械演習施設平面図	1
図3 機械演習施設全景	1
図4 機械演習施設集合実測図	2
図5 機械側面実測図	2
図6 機械構造部分の詳細	2
図7 機械機式図	2
図8 トラクツ機復原図	3
図9 レンガにみられる刻印	3
図10 調査区の位置	4
図11 調査区と土層断面の位置	5
図12 調査区土層断面図	5
図13 調査区土層断面図	6
図14 東門（東08地点）調査区の位置	7
図15 崩壊断面図	8
図16 2005年度の調査地点【1】・津島地区－	9～10
図17 駐屯地と廻りにこる陸軍関連施設	11
図18 駐屯地内の施設配置と現存する施設の位置	11
図19 岡山駐屯地内での部隊配置の変遷	12
図20 旧陸軍の建造物	13
図21 現存する門と門柱	14
図22 モルタルを上塗りした門柱	15
図23 嵌め込み式石板と吊り下げ金具	15
図24 外周塗設	16
図25 工兵第十聯隊将校集会所と庭園	17
図26 記念碑等の石造物	18
図27 記念碑に刻まれた文字	18
図28 工兵第十大隊（聯隊）機械演習施設	18
図29 駐屯地周辺の陸軍関連建物	19
図30 古墳に築かれた対空陣地	19
図31 畦の戦とトロッコ軌道	20
第2章	
図32 調査区位置図	22
図33 調査地点配図	22
図34 土層断面図	23
図35 2005年度の調査地点【2】－鹿田地区－	24
図36 鹿田遺跡の古代の井戸及び参考資料	27
図37 鹿田遺跡の古代末～中世の井戸及び参考資料	28
第3章	
図38 鹿田キャンバスでの展示風景	31
図39 鹿田キャンバス成果展アンケート結果	32
図40 津島キャンバスでの展示風景	33
図41 第9回成果展アンケート結果	33
図42 戦場体験	34

## 表 目 次

表1 2005年度津島地区調査一覧	8
表2 岡山駐屯地における配置部隊の変遷	12
表3 建物の造りと用途	13
表4 レンガの大きさ	13
表5 2005年度鹿田地区調査一覧	23
表6 施設遺跡の井戸	26
表7 放射性炭素年代測定資料一覧	30
表8 樹種同定一覧	30
表9 第7期保存処理工程	31
表10 これまでの保存処理工程	31
表11 外部委託による保存処理遺物一覧	31

## 付表・付図

付表1	1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	41
付表2	2004年度以前の構内主要調査（1983～2004年度）	41
付表3	埋蔵文化財調査研究センター収藏品概要	48
付表4	埋蔵文化財調査室刊行物	49
付表5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	49
付図1	津島地区全体図	51
付図2	2004年度までの調査地点【1】－津島地区－	53～54
付図3	2004年度までの調査地点【2】－鹿田地区－	55
付図4	2004年度までの調査地点【3】－三朝地区－	56
付図5	2004年度までの調査地点【4】－東山地区－	56
付図6	2004年度までの調査地点【5】－倉敷地区－	56

### 例　　言

1. 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2005年4月1日から2006年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査実績およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島南北道路は岡山市津島中一丁目1-1、二丁目1-1、三丁目1-1、鹿田道路は岡山市鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 本文は、小林大介・野崎貴津・光木順が分担執筆し、執筆者名は氏名および文末に記した。
4. 編集は稻田秀司・岡山センター員の担当のもとに野崎が担当した。

### 凡　　例

1. 大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14（2002）年4月1日より施行された「測量法及び水路敷設法」の一部を改正する法律にに基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
  - 1) 津島地区では、国土測量V第7区標準の座標北を基準とし、(X=144,156,4617m、Y= 37,246,7496m)を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は、約50mの方格で分割した区画を用いている。
  - 2) 鹿田地区では、国土測量V第7区標準の座標北より東に15°振り出した座標軸を基準とし、(X= 149,456,3718m、Y= 37,546,7700m)を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一度5mの方格による地区割りを用いている。
3. 本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は岡山府標準の座標北を、他は北を用いている。
2. 岡山大学構内の道路名は、周知の道路の場合はそのまま名称を記載する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福昌道路」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
3. 調査名稱は、「発掘調査」に分類したものについては、遺跡ごとに調査類に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して実施したものは「試掘・確認調査」に分類する。
4. 表に記載した所轄部は、原則として各学部の頭文字を略分として用いている。
5. 付表2に記載した構内一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分を含め、すべてのデータは、当センターにおいて管理している。
6. 本文などで使用している調査番号と一致する。
7. 本紀要に掲載の地形図（付図1）は、岡山市地図を複写したものである。

# 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

## 第1節 測量調査の概要

### 1. 旧陸軍工兵第十聯隊橋梁演習施設の測量調査

#### a. 調査の経緯

文・法・経済学部1号館西の焼却場脇（図1）に残る赤レンガ造りの構築物は、岡山大学津島キャンパスの敷地に残っている旧陸軍関係の工作物の一つであり、「橋梁爆破演習用」の橋梁模型と考えられてきた。近年、遺構の傷みが進んだため、橋梁施設、周辺の土壠を記録対象として、2005年7月5日～13日にレンガ造工作物の実測と測量調査を行った。

なお、調査前の橋梁施設は草木で覆われており、周辺も荒廃していたため、最初に草刈りと清掃を行った。

#### b. 調査の成果

##### ① 橋台と橋脚

繁茂していた草木を取り除くと、橋梁架設用の橋台1基と橋脚2基（図2・3）、さらに敷地界プロック塀のある西側には、当時の敷地区画である土壠が確認できた。橋脚は、橋台から南に5～6m離れた位置で東と西に2基あり、東西2基の橋脚同士の距離は、底部で測って約6mである。いずれも倒れていたが、橋台との対応関係からみて、原位置からそれほど動いていないと考えられる。土壠の頂部と橋台西端間の距離は約5.7mである。

一方、橋台、橋脚とも煉瓦積みで構築されており、その積み方は、長手だけの段と小口だけの段を交互に積むイギリス積みである。それでは、今回調査した橋台と橋脚について、詳細にみていくたい。

**橋台**　橋台は原位置をとどめており、長さ8m、高さ1.1mの壁体を築き、その背後を盛土によって支えるという構造をとる（図2）。実行きは、小口部以外は確認できず、その幅は80cm程度である。壁体の上部にはL字状に段が設けられており、橋の上部構造である橋桁やト

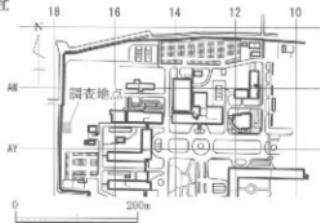


図1 橋梁演習施設の位置（縮尺1/8000）

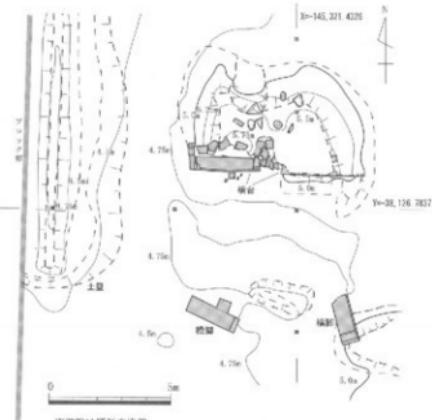


図2 橋梁演習施設平面図（縮尺1/200）



図3 橋梁演習施設全景（南より）



図4 橋梁演習施設橋台実測図（縮尺1/60）

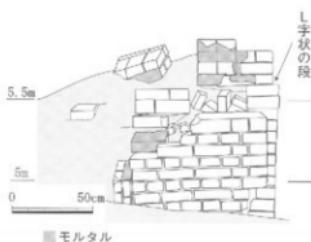


図5 橋台側面実測図（縮尺1/30）



図6 橋台溝状部分の詳細（南西より）

ラス部分の設置に関係する部分であると考えられる。段部は現存している12段の煉瓦のうち、上4段分（約30cm）となる。なお、最上段の煉瓦上面には一部にモルタルが残っている。

橋台は中心部を境に二つに分離しており、その間に通路状の空間を確認できた（図4・6）。ここでは図4に示したように、通路状空間を中心に橋台を東西に分け、それぞれ「西半橋台」、「東半橋台」としておく。通路状空間の両壁となる橋台側面はモルタルで整えられており、東西の橋台ともに縦状の削り込み部が縦方向に認められる（図6）。1982年以降に撮影された写真<sup>11)</sup>では、通路状空間の上に東西の橋台をつなぐ構造物が架けられていた状態が確認されるが、削り込み部や通路状空間自体の詳細な機能は明らかではない。

橋台の残存状況は比較的良好と考えられるが、西側の小口面はモルタルがはがれ、倒壊寸前である（図5）。また、通路状空間を抉んだ東部分は、すでに段上部全体が消失している。なお、通路状空間や西半橋台の西側小口の崩れた部分から、煉瓦造工作物の内部が空洞になっていることがわかった。これは段部の半分近くが下からの支えなしの状態であることを意味するので、橋台上にさらに重量のあるものをのせるのは不向きな構造である。藝術やトラス部分が軽い素材でできていたのか、あくまで模型であったからかなどの理由を考えうるが、明確にはしえない。

橋脚 東西に二本あるが、两者とも同じ形態であるので、全体像がよくわかる西側の橋脚を図化した（図7）。

東側の一基は下部が埋まっているが、西側の一基は全体が露出しており、現状で高さ213cmを測る。最下部にはモルタルが付着していることから、もう少し長くなる可能性もある。現状では煉瓦を31段積んで形

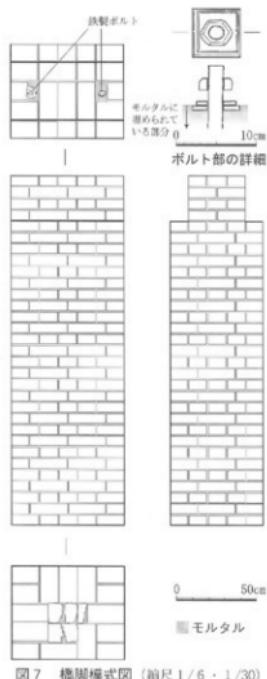


図7 橋脚模式図（縮尺1/6・1/30）

成しており、上部4段（28cm分）では、側面から見て凸状の形態になるように段が形成されている。段より上を上部、下を下部とすると、上部は35×69、下部は57.5×69cmの平面形態となる。

段構造は橋脚・橋台ともに煉瓦4段分が認められるため、この部分に水平に橋桁を架けていたと考えられる。したがって、現状の橋脚の高さ213cm

から橋台の高さ110cmを引いた、約1m分を埋設して橋脚を立てていたと考えられる。また、橋脚の最上面には2ヶ所で鉄製ボルトが確認できる（図7上）。

ここで、判明した状況を踏まえて、橋梁の復元案を述べることとする。橋台・橋脚に認められた段構造や2本の橋脚を使用して橋桁を架けていたと考えた場合、この橋梁演習施設はトラス橋の橋梁模型であった可能性が考えられる（図8）。橋脚の規模や形態にもよるが、トラス橋は上部構造物を構築するために橋桁の両側に支柱が必要であるため、本施設に残された橋台<sup>③</sup>と2本の橋脚はそのような関係であったと考えられる。したがって、推定したような復元図ならば、実物大に近い橋梁模型であったと推測される。ただし、これらはあくまで推測であり、今後の類例調査により検討を深めていく必要がある。

### ② 煉瓦（図9）

橋脚と橋台に用いられた煉瓦には、松葉状のモチーフを向い合わせに二本組み合わせた菱形状の刻印が多数確認でき、その中には菱形の中に「サ」の字が刻まれたものもあった。これは、「瀧崎煉瓦株式会社」によって製造されたものである<sup>④</sup>。また、煉瓦の表面にピアノ線による擦痕がないことから、「機械成形煉瓦」ではなく、全て「手抜き成形煉瓦」であると考えられる。さらに、主として大小二種類の煉瓦が使用されており、大きな煉瓦は、長手が22.5~23cm、小口が10.5~11cm、厚さが5.5cmである。小さな煉瓦は大きな煉瓦の七五、すなわち長手が3/4程のサイズで16.5cmである。また、橋脚には便宜的に、さらに小さい半片、つまり長手のサイズが1/2のものも使用されている。

この橋梁施設で使用されている煉瓦の規格は、1925（大正14）年に制定されたJES規格の210×100×60mmとは違っているため、それ以前に製作された可能性がある。

### ③ 土壘

橋梁演習施設の西側には高さ約30cm程の土壘がみられる。調査範囲でとらえられる距離としては約11mの長さで南北方向に延びていた。残存状況がそれほど良好ではないので、正確ではないが、幅は約3mである。土壘本来の高さは、津島キャンパス東南部の残存状況の良い土壘から考えて、80cm近くの高さがあったものと予想される。

## c. 構築時期と演習場の用途

文・法・経済学部の周辺は、1908（明治41）年以降に第十七師団轄重兵第十七大隊（物資補給部隊）が置かれ



図8 トラス橋復原図

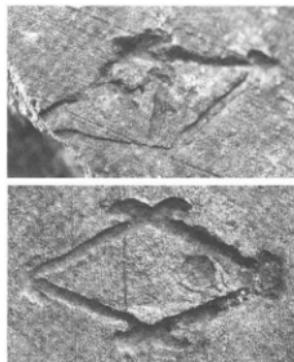


図9 レンガにみられる刻印

たが、1925（大正14）年の第十七師団廃止後には、工兵第十大隊が駐屯した。橋梁演習用施設は工兵に関わるものと推定できるので、1925年以後に構築された可能性が高い。また、昭和に入り、橋台や橋脚はコンクリートやセメント製になることや、煉瓦にJES規格が適用されていたことを考慮すると、JES規格以前の煉瓦の流通がどれほど継続したのか、また、駐屯地などにどれほどストックされていたのかは不明瞭であるものの、橋梁演習施設は工兵第十大隊が駐屯するようになって、ほどなく構築されたと考えられる。この施設を用いて実際にどのような演習を行ったのかについては、具体的な推定は難しい。ただ、橋台、橋脚の模型を丁寧に構築している点や爆破によって破壊された残骸が確認できない点などから判断すると、爆破実験を行っていたというよりは、橋梁の架設演習、橋梁爆破用の火薬設置の演習などに用いられたと考える方がより妥当だろう。（中村大介）

\*調査期間中には、環境理工学部の馬場俊介先生、比江島慎二先生からは橋の構造について、その他多くの方々から、旧陸軍施設に関する情報を提供いただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

## 註

- (1) 「津島のむかし」編集委員会1992『津島のむかし』、p.55掲載写真
- (2) 橋台については、中央に通路状空間があるが、その幅は約0.8mと使い。また、1982年以降に撮影された写真に残る構造物を参考にすると、橋門構造に近いものとも考えられる。
- (3) 清亮中、高橋幹氏のご教示を受けた。

## 第2節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

津島地区において2005年度に実施された立会調査は、津島地区の北に近接する土生地区のものも含めると、事業数では15件となる（表1、図16）。そのうち、工学部総合研究棟（旧工学部本館）の改修開発工事の事業数が8件で、過半を占める。また、津島地区のキャンパス環境整備（門扉改修等）工事では、地区内の各所で門扉改修とともに立会を実施している。しかし、これらの工事はいずれも掘削深度が小さく、遺物包含層に到達しないものや、掘削範囲が非常に狭いものであった。

以下では、掘削深度が大きく、特に重要な知見が得られたプール改修（排水管改修）工事と、キャンパス環境整備（門扉改修等）工事のうち、近代の土地区画の痕跡とみられる畦町と溝を確認した東08地点における立会調査の成果について概要を報告する。

### 2. プール改修（排水管改修）工事に伴う立会調査

（津島南 BC～BE03、BB～BC02区）

#### a. 調査区の位置と調査の経過（図10・11）

本調査地点は、津島南地区的南東に位置するプールから、地区の東辺を南北に通るものである。東は津島江道遺跡が所在する岡山市立岡北中学校の敷地に隣接しており、弥生時代前期やそれ以前の可能性もある水田のひろがりや、古代の遺構が確認される可能性もある重要な地点である。工事は津島地区の南東に位置するプールの排水を直線距離で北に約170m離れた下水道に接続するものであり、

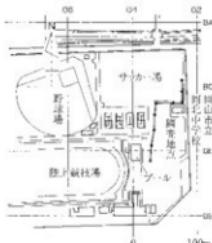


図10 調査区の位置  
(縮尺 1/7500)

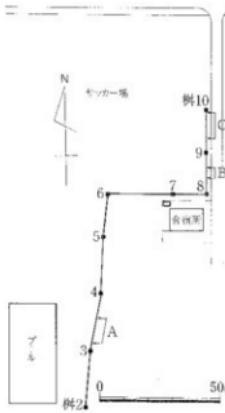


図11 調査区と土層断面の位置  
(縮尺 1/2000)

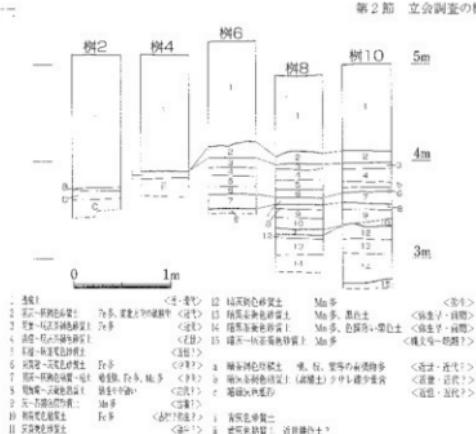


図12 調査区土層柱状図 (縮尺 1/50)

掘削した距離は165mにおよぶ。

調査は2006年3月3日から31日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

## b. 調査の概要

### ① 層序と地形 (図12・13)

工事はプール南側の排水樹からサッカーフィールド北東隅の下水道接続溝までを連結するものである。管路の傾斜をつけるため、南から北へ深度を増しながら掘削しており、樹2から樹4までは堤地表面から約1.4mまで、樹4から樹6までは1.7mまで、樹6から樹10までは1.8~2.0mまでの深度で掘削した。

**層序** 各層の時期は、共伴遺物が少なく決めがたいが、周辺の調査成果を参考に推定しておきたい。

1層は1907(明治40)年の陸軍駐屯地造成以来の造成土である。2層は灰褐色砂質土で、明治時代の耕作土である。3、4層は明黄橙~明灰茶褐色砂質土で、近世の耕作土である。5層についても色調や土質が近似しており、近世の耕作土である可能性がある。6層は明黄橙灰褐色砂質土である。近世か中世かは決しがたい。7層は灰褐色砂質土で、中世の水田層と考えられる。8層は明黄橙~灰褐色砂質土、9層は灰~茶褐色弱砂質土、10層は明灰褐色砂質土、11層は灰黃褐色砂質土である。8~11層については共伴遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代から古代の土層と考えられる。12層は暗灰褐色砂質土で、弥生時代の上層とみられる。13~14層は暗灰~灰茶褐色砂質土である。下位の14層は13層に比べて色調が薄いため、分層が可能であった。マンガンを多量に含む。これは津島地区一帯にひろがりをもつ、「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。15層は暗灰~灰茶褐色砂質土で、縄文時代後~晩期の土層と考えられる。

樹2では、1層以下で確認されたa~c層は、他地点の土層とは異なるもので、粗砂の上位に腐植土が堆積したものである。腐植土には多量の根・枝・葉などの有機物が含まれ、湿潤状の環境下で形成されたと推定される。

樹4では、1層以下で確認されたI、II層は近世~近代の耕作土と考えられるが、津島岡大遺跡の他地点でもよくみられる土層とは異なり、粘性が強い。他地点よりも標高が低いことによって、土質の異なる土層が堆積したり、土地利用の違いによって土質が異なったものとも考えられる。

**地形** 今回の調査地点のうち、北東部分である樹6~10の区間の堆積は中世以降では同様の状況を示すうえ、

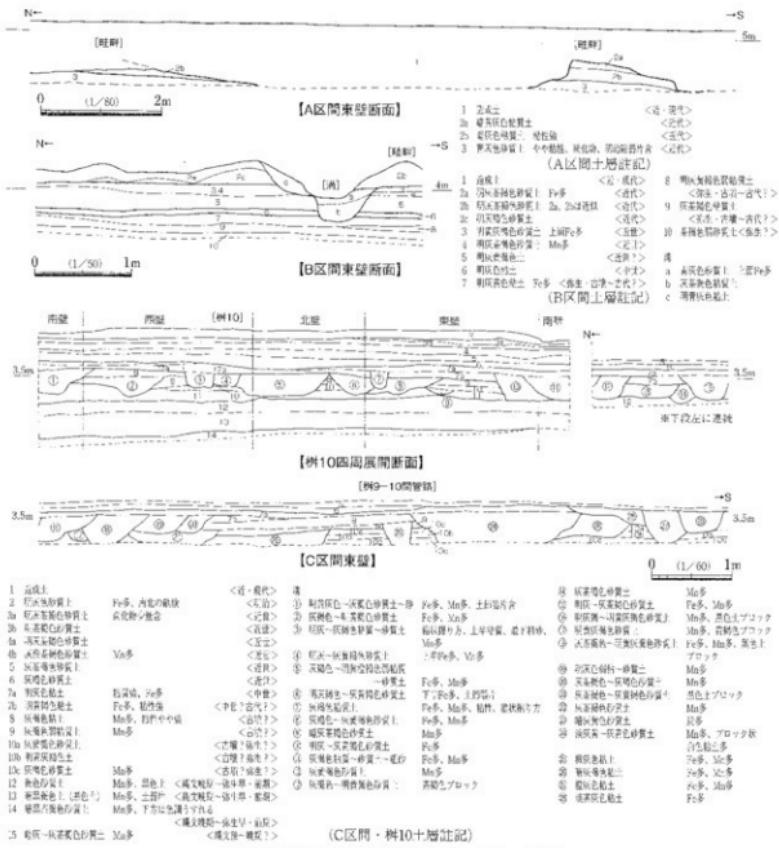


図13 調査区土壤断面図(縮尺1/50・1/60・1/80)

各土層の上面の標高もそろっており、平坦な耕作面がひらがっていたことが推測される。一方、南半部の桟2～6では、掘削深度が浅く、近世以降の土層の堆積状況を部分的に確認したにとどまるが、桟4～6区間に明治時代の耕作面の上面が南にむかって下降していること、桟2部分では他地点に比して造成土がもっとも低い標高から堆積していること、湿地状の堆積を示す廃耕土やその下位に溝や河原の堆積を推測させる粗砂が堆積していることから、桟4以南の部分は河道や溝などの水路が通っていた低地であり、厚い粗砂によって埋没した後は湿地状の環境となっていたと推測される。

## ② 運構 (図13)

本調査地点ではA・B区間に近世あるいは近代の溝や畦畔などの土地区画に関連する運構を、C区間および桟10で弥生時代から古代・中世と考えられる多数の溝が切り合い関係をもって掘削されている状況を確認した。

**A区間**（図13上）：近代の東西方向の畦畔2条を確認した。調査地点の掘削深度は浅かったが、南側の畦畔（2a・2b層）は比較的明瞭にのこる。北側（2b層）は削平をうけていると考えられ、緩やかな高まりを確認できたにとどまる。畦畔の間には溝が通ると考えられるが、掘削深度が浅く確認できていない。

**B区間**（図13中）：近世・近代の東西方向の溝（a・b・c層）と畦畔（2b層）を確認した。近世段階の溝が埋没した後、南側では近代の畦畔が溝埋土上にかかるように構築されている。近世から近代にかけて、わずかに溝の位置を変えていることがうかがわれる。近代の溝は幅1.5m、近世の溝は幅0.6mである。

**C区間・樹10**（図13下）：約12.5mの範囲に弥生時代～古代・中世の東西方向の多数の溝が切り合いながら掘削されている状況を確認した。これらの溝は掘削の開始面が異なり、7a・7b・8・9・10a・11層から掘削されている。これらの溝は激しく切りあい、本米の規模を知ることができないものが多いが、最も小規模なものは幅0.4m（溝⑨）、最も大規模なものは幅2m（溝⑩）と、その規模には聞きがある。また、掘り方の形状はレンズ状のものや半円形のものが多いが、樹10部分では箱型に掘削している溝を確認している（図13下：断面③・⑦）。東塀と西壁との対応関係が不明瞭な溝が多いが、この溝に関しては掘り方の形状と埋土の性質が類似することから同一の溝であると推測される。溝④・⑥、溝②・⑧についても埋土の性質から対応するものとみられる。

### c. まとめ

本調査地点は津島南地区の東辺にあたり、これ以西にひろがる大学構内の地形や遺構の状況を推測するうえで重要な地点である。弥生時代前期やそれ以前の水田が作られた可能性のある津島江道跡（岡山市立岡北中学校地点）にも隣接しており、それらの成果との対応関係を考えるうえでも参考となる。

立会調査の結果、近世・近代段階の東西方向の溝や畦畔などの土地区画に関連する遺構、弥生時代から古代・中世までの溝群などの遺構を検出した。また、弥生時代前期までに形成された「黒色土」が厚く良好に堆積していること、これらの黒色土の細かい分層が可能であることが判明したことは、この地点の周辺での弥生時代前期やそれ以前の水田の状況を追及するうえで重要な手がかりとなるであろう。今後、本調査地点周辺での発掘調査を実施する場合、黒色土の細分を手がかりに前期水田の展開を詳細に追及することも可能となろう。（野崎貴博）

## 3. キャンパス環境整備（門扉改修等）工事に伴う立会調査（津島南 BE02、BG07）

### a. 調査区の位置と調査の経過（図14）

2005年度後半にキャンパス全体の門の改修作業が行われ、南グラウンドの東門と南門の二箇所において掘削を伴う工事が行われた。両地点とも近代・近世の上層に達する掘削が行われたが、東門調査地点（東08地点）では、近代・近世の区画に関係する大きな畦畔を検出することができた。そこで、東門調査地点（東08地点）の報告を行ふこととする。

東門調査地点は津島南地区の東端に位置し、岡北中学校との境に

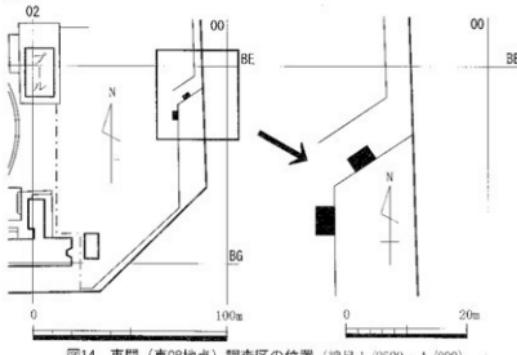


図14 東門（東08地点）調査区の位置（縮尺1/2500・1/800）

当たる。現在、この場所には、南北方向の溝が通り、その上に門にぬける橋が架かっている。工事はこの橋の改修に対して行われた。橋は南北2箇所あり、北側は溝を保護する石組みによって、すでに掘り返され、明瞭な土層と遺構が確認できたのは南側だけであった。以下では土層と遺構について報告する。なお、南側の調査地点は3×3.6m範囲で調査され、掘削深度は1mである。

## b. 調査の概要

### ① 順序 (図15)

明治期の大畦畔が良好に残る西壁の一部を図化した。調査地点の各層には遺物が伴わず、明確な時期は決めがたいが、これまで蓄積されている調査成果を参考に、それらの時期を示しておきたい。

1層は現在の表土、2層は明治時代の造成土、3層は青灰色砂質土で明治期の耕作土である。なお、人柱畔にのるかたちで3層に極めて近い土層が確認された。大畦畔の上部が崩れた部分とも考えられるが、ほとんど差がない、明確には3層と区分できない。4層は暗青灰色砂質土で、大畦畔を挟む3層と同様、明治期の耕作土である。5層は青灰色砂質土に褐色砂質土が混じったもので、明治期の耕作土であると考えられる。6層は褐色砂質土で近世の耕作土である。7層は6層に類似した色調ながらも土質にしまりがない。中世層と考えられる。

### ② 遺構 (図15)

①層は淡青灰色砂質土で明治期の大畦畔である。幅は約70cm、高さは耕作層（5層）下面からみて28cmとなる。②層は黄灰色砂質土で近世の畦畔であり、幅は33cm、高さは7cmであった。①層は②層にかぶせるようにして構築していることから、明治期の人柱畔は、近世の段階で形成されていた畦畔を踏襲してより大きく構築し直されたことがわかる。また、①層と②層の境にある石は、①層を積む際の補強であると考えられる。

一方、明治期の人柱畔は本調査地点東壁でも一部確認されており、東西方向にのびていたと考えられる。この畦畔の位置と方向は、現在の岡北中学校の南に通る小路に合っていることが本調査地点からの目視で容易に確認できた。従って、現在の地割りや小路がこの時期のものを踏襲している可能性を推定しておきたい。（中村）

表1 2005年度津島地区調査一覧

番号	地名	対応地区	標高	所轄	調査会員名	調査期間	測量深度 (GL-m)	内 容
1	立会	津島北	AW08	工	工芸部会員研究検討会作工事	7.27	0.5	灌漑水内
2.	立会	津島北	AW09	工	工芸部会員研究検討会機械設備工事	7.29	1	既設内
3	立会	津島北	AV08	工	工芸部会員研究検討会耕作工事 (併設電柱架設工事引受け)	8.5	1.5	(GL-0.9mまで造成土、以下、青灰～白灰色の粘土層を標準、三合土層は確認されず)
4	立会	津島北	AV08～11	工	工芸部会員研究検討会電気設備工事 (電路開拓)	9.20, 9.28, 10.5	0.7～1.5	灌漑水内
5	立会	津島北	AW09	工	工芸部会員研究検討会改修電気設備工事 (アース設置)	11.11	1.8	基礎層・黑色土・雨淋の上層堆積確認
6	立会	津島北	AW08, AW09	工	工芸部会員研究検討会改修工事(インバータ側)	11.15, 11.22	1～4	(GL-1.25m)で近代導体層
7	立会	津島北	AV-AW10	工	工芸部会員研究検討会電気設備工事 (電力分配盤改修)	11.15, 12.26	1.4	(GL-1.3m)で近代導体層、近代水道渠まで
8	立会	津島北	AW07	工	ガス管切り離し工事 + (高圧外被工事)	12.27	1.5	既設内、既活用～近代層?確認
9	立会	津島南	BP02, BP07	工	キャンパス履歴発掘(門檻改修等)工事	1.26, 2.13	1～1.3	開口地盤: (GL-0.7m)で明治終りとほぼ一致、1.3mで中世層認、6.05地点: 近代転用、平田屋跡
10	立会	津島南	PR03	事	ブル改修電気設備工事	3.2	0.75	造成土内
11	立会	津島北	AY13～16, AX16	文、法、経営会員等資格修理工事 法規	2.6～13, 3.11	1.1～1.45	一部で表面、近代耕作土を確認	
12	立会	津島北	AV10	事	北門外灯回設工事	3.23	1.2	造成土内
13	立会	津島南	BC-BC01, BC-BC02	事	ブリの改修(廊木張改修)工事	3.3～31	0.75～2.4	梅森墓群～近代層の直接接続、「黒色土」確認、体 内・み縫の諸多段、近世土壌、近代大崎町・溝を確認
14	立会	津島南	BS-BCH1	事	ナカラ場造営木工・設置工事	3.22	2.0～2.2	オーラによる測量、一度で「墨色土」確認
15	立会	土生	—	事	トクダ貢益会公止木木造修理工事	3.1～11	0.6～1.3	(GL-0.7m)で昭和初期、以下と世帯を確認

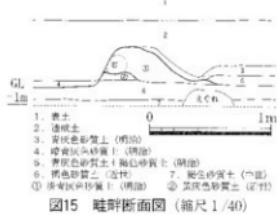


図15 畦畔断面図 (縮尺1/400)

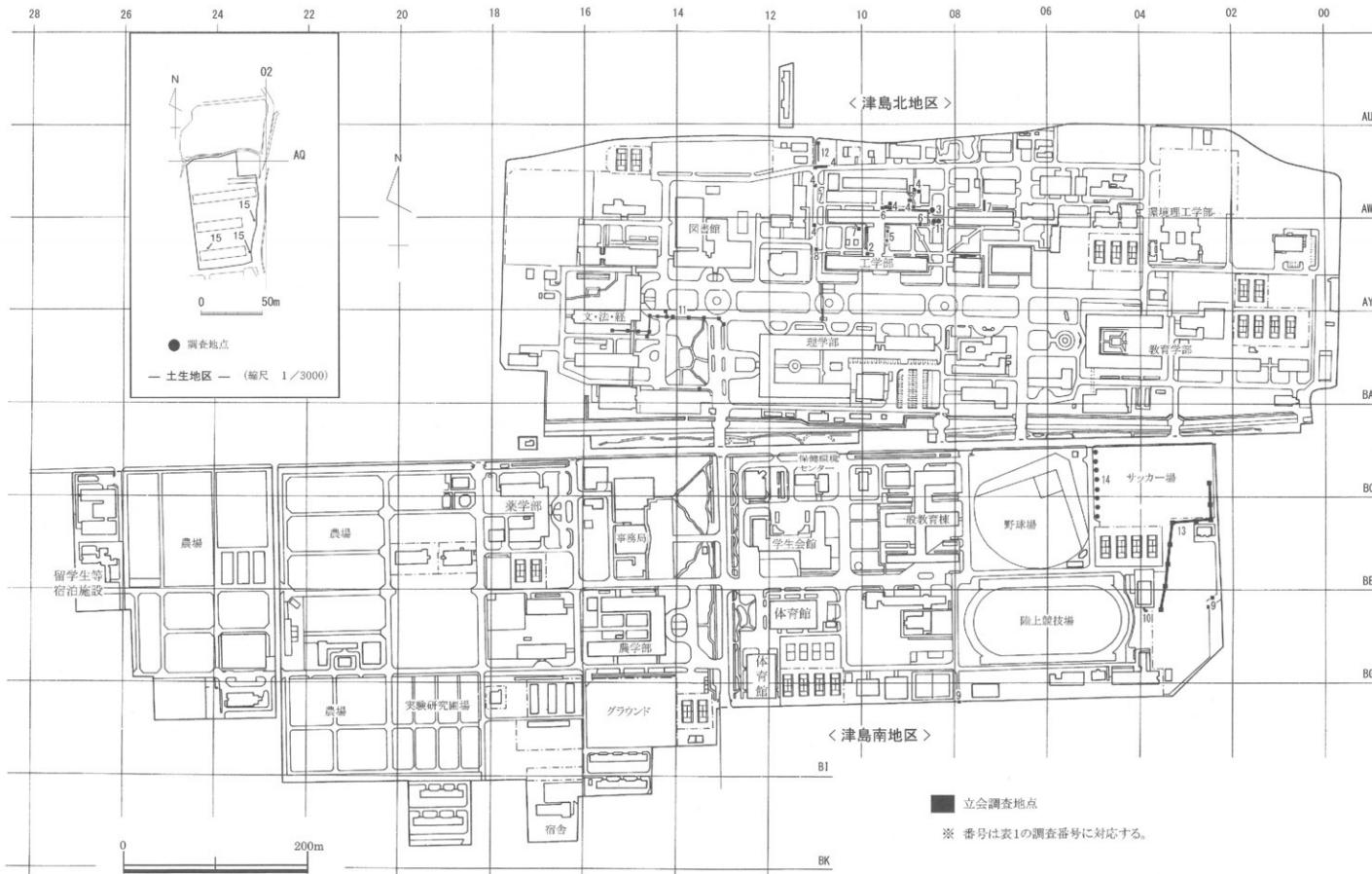


図16 2005年度の調査地点【1】－津島地区－（縮尺1/4000）

## 第3節 津島岡大遺跡の研究

### 1. 津島地区とその周辺の陸軍関連施設について

はじめに

岡山大学津島地区はかつて陸軍第十七師団の駐屯地であった。陸軍第十七師団は、日露戦争後の軍備拡張の気運のなか、1907（明治40）年に創設され、岡山県御津郡伊村（現、岡山市津島中）に駐屯地を造成した。駐屯地には第十七師団司令部を筆頭に、歩兵・騎兵・工兵・野砲兵・山砲兵・輜重兵の各部隊と兵器部が駐屯した。その後、1925（大正14）年、世界的な軍縮の流れのなかで第十七師団は廢止されるが、岡山駐屯地は引き続き第三十三旅団司令部、岡山聯隊区司令部、歩兵第十聯隊、工兵第十大隊（後に聯隊）と陸軍兵器本廠岡山出張所が使用した。岡山駐屯部隊はその後の戦況に応じて大陸や南方に出征し、駐屯部隊も移り変わっていく（表2）。

1945（昭和20）年、太平洋戦争は日本の敗戦により



図17 駐屯地と周辺にのこる陸軍関連施設  
(昭和30年測図、大正14年第2回修正測図、昭和21年6月20日印刷、同25日施行、内務省地図課監修) を一部改変

(昭和30年測図、大正14年第2回修正測図、昭和21年6月20日印刷、同25日施行、内務省地図課監修) を一部改変



図18 駐屯地内の施設配置と現存する施設の位置 (縮尺1/10000)

終し、岡山駐屯地にも進駐軍が入った。1917（昭和22）年3月には進駐軍が引き上げ、その後幕末高等学校が一部を譲りうけて仮校舎とした。

1949（昭和24）年、第十七師団駐屯地跡地に岡山大学が設置された。園学当初はこれらの建物や施設を利用していたが、建物の老朽化や校舎の新築に伴って建て替えや取り壇しが進められた。また、キャンパス環境整備や道路・門の拡幅に伴い、外周を区画していた土塁や門も、コンクリートブロック塀や新しい門柱にかえられた。なお、今後もキャンパスの整備が予想されるところであり、現在のこっている戦争関連施設がこのままのかたちでのこる保障もない。当センターでは、これまで上層構造物を有さない施設についての記録を順次進めてきたが<sup>⑩</sup>、今回はその調査成果や、新たな知見を加えながら津島地区構内の戦争関連施設についてまとめることとする。

#### a. 津島地区構内にのこる戦争関連施設

陸軍駐屯段階につくられた諸施設のうち、津島地区では今までいくつかの施設がのこっている（図18）。それらは、建物、外周施設、庭園、記念物、その他の施設など、いくつかの種類にまとめることができる。以下にそれらの施設について概略を記載する。なお、それぞれの施設の位置、ならびに各部隊の配置は図18・19に示している。

##### ① 建物（図20・表3）

1952（昭和27）年3月31日付で人蔵省中国財務局長から岡山大学長あてに出された『国有財産所管換調書』（以下、「所管換調書」）が岡山大学事務局に保管されており、全体で250棟の建物が引き渡されていることが記録されている。その内訳は、木造平屋建て建物225棟、木造二階建て建物17棟、煉瓦造平屋建て建物8棟と、ほとんどが木造建物（242棟）であり、また平屋建て建物（233棟）である<sup>⑪</sup>。煉瓦造や二階建ての建物が極めて少數であったことがうかがえる。そのうち、現在までのこっている建物は8棟であり、ほとんどの建物が解体されてしまった。のこっている8棟の建物についても改変をうけているものが多い。

表2 岡山駐屯地における配置部隊の変遷

岡山/鹿児島/那覇区 司令部		那覇方面						その他の		できごと
		歩兵	騎兵	野砲兵	山砲兵	工兵	機重兵			
1907(明治40)年～ 1926(大正14)年	第17師団 岡山駐屯区	第53師団 【転営：船越より】	第21騎兵 【転営：船越より】	第23野砲 【転営：福知山より】	第2大隊 【廃止】	第11大隊 【廃止】	第17大隊 【廃止】	第17騎兵		第17師団創設
1925(大正14)年～ 1936(昭和11)年	—	第10師団 【転営：船越より】				第10大隊 【転営：福知山より】	第10機械	陸軍兵器本廠	岡山出張所【開設：1925】	第17師団廃止 第10師団管轄区に 支那事変
1938(昭和13)年～ 1941(昭和16)年	—	第51騎兵團 【編入】				第10機械 【転営：船越より】	第10機械	四・一兵糧大廠【昇格：1925】		
1941(昭和16)年～ 1945(昭和20)年	9 岡山駐屯区	中部栗田十八 【連隊の連隊号】				工兵第5群隊 【中前第五十】	工兵第5群隊 【中前第五十】	河川陸軍兵團總指揮部 【改称：1939】		太平洋戦争開戦
	岡山駐屯区	中国軍資區步兵第5師光輝 【改称：1945】	【転営：長野へ】			正典陸軍兵團總指揮部兼葉山支廠 【転営】				終戦

(左上) 広島陸軍兵器補給廠岡山支廠事務所  
(左下) 岡山聯隊區事務所(中上) 歩兵第十聯隊兵舍  
(中下) 工兵第十聯隊特種集会所(右上) 広島陸軍兵器補給廠岡山支廠  
北倉庫炊事場：現存  
(右下) 工兵第十聯隊食堂並浴場：現存

図20 旧陸軍の建造物

現存する建物や、写真で記録されている建物には、木造、レンガ造、モルタル造のものがみられる。しかし、『所管換調書』によれば、1952年当時にはモルタル造の建物ではなく、現在モルタル造となっている建物は大学に引き渡された後の改修等によるものであると考えられる。現存する建物のうち、7棟は津島北地区にあり、工兵隊（現、文・法・経済学部、附属図書館と理学部の一部）や広島陸軍兵器本廠岡山支廠北倉庫（現、工・教育・環境理工学部と理学部の一部）の建物である。津島

南地区の建物は司令部の置かれた区画内（現、事務局周辺）のもの<sup>30</sup>で、歩兵隊（現、農・薬学部一帯）の建物はない。

まず木造建物について、現存する建物や取り壊し前に撮影されていた写真によって当時の姿を知ることができるものから特徴をみておこう。屋根の造りには寄棟造と切妻造のものがみられる。そのうち、建物の用途を特定できるものを抽出してみると、寄棟の建物は司令部・本部や事務所に使われている場合が多く、切妻のものは倉庫等に使用されている傾向にあるようである。窓は、いずれも縦長に窓枠を取り、上下に開閉する形式である。

煉瓦造平屋建て建物については、工兵第十聯隊食堂並浴場（現、文学部考古学資料館・二部学生BOX）、広島兵器補給廠岡山支廠北倉庫（現、工学部15号館：旧、放送大学）として使用されている2種が現存する。後の改修が施された部分もある<sup>31</sup>が、当時の状態をとどめるものである。この2種の建物の屋根はいずれも切妻造である。窓は木造建物と同様、縦長の枠取りで、上下に開閉するものである。レンガの積み上げは、いずれもイギリス積み<sup>32</sup>によって積み上げる。

使用されているレンガの大きさは、工兵第十聯隊食堂並浴場（文学部考古学資料館）では $18.5 \times 10 \times 5.5\text{cm}$ 、 $16.5 \times 10 \times 5.5\text{cm}$ 、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫（工学部15号館）では $22.5 \times 10 \times 6\text{cm}$ 、 $17 \times 10 \times 6\text{cm}$ であり、それぞれ2種類の法量のレンガを用

表3 建物の造りと用途

用途	造り		
	木造平屋建	木造二階建	煉瓦造平屋建
本部・事務官舎	17	1	18
兵舎	25	10	35
食糧・施設部・炊事調理室等	24	1	27
倉庫・貯藏庫	72	5	2
砲・機械室等	10		10
医務・衛生（施設含む）	56	1	56
勤務施設等	3	1	4
料・車両運搬設備	6		6
警備防護	6		8
所合室	2		2
その他・内容不明	4		4
	225	17	825

表4 レンガの大きさ（単位：cm）

名前	積み方	長手	小口幅	高さ
工兵第十聯隊食堂並浴場（文学部考古学資料館）	イギリス積み	18.5	10~10.5	5.5~6
		18.5	10~10.5	5.5~6
広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫	イギリス積み	22.5	10~10.5	5.5~6
（工学部15号館：旧、放送大学）		17.0	10~10.5	5.5~6
陸軍技術訓練院（文・法・経済学部駐車場）	イギリス積み	22.5	10~10.5	5.5~6
		18.5	10~10.5	5.5~6
山崎第二駕籠表門（理学部南北入口）	小口積み	16.5	10~10.5	5.5~6
広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫（現、理学部学生生活センター）	長手積み	22.5	10~10.5	5.5~6

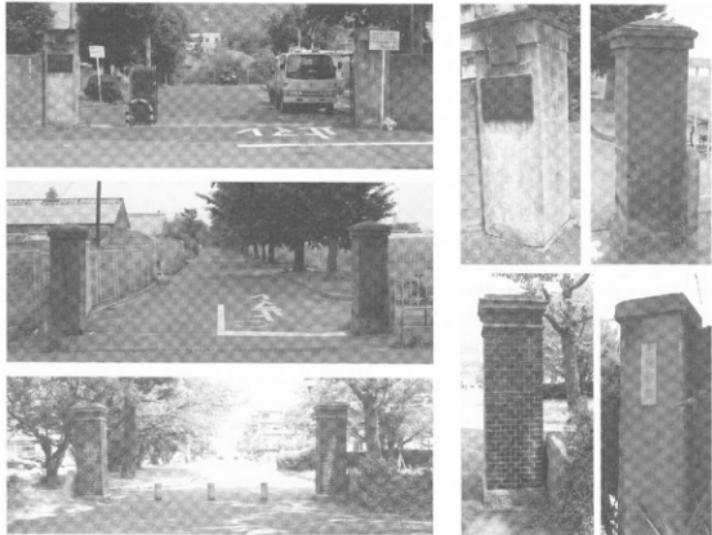
いている。建造物以外のレンガ造構造物も含めた使用レンガの大きさは表4に示した。このうち、長手の長さが16.5~17.0cm、22.5cmのものについては、長さの比率から、前者が後者の「七五」(3/4)の切断レンガである<sup>16</sup>。工兵第十聯隊食堂並浴場に用いられたレンガは長手の長さが18.5cm、16.5cmの組み合わせとなり、現在のところ岡山駐屯地内で確認できるレンガでは切断レンガの一般的な比率とならない。いずれも1925(大正14)年に統一されたレンガの法量とも異なっており、それ以前に生産されたレンガを用いたものと考えられる<sup>17</sup>。

岡山駐屯地に建てられた建物の特徴として、①木造平屋建て建物が圧倒的多数を占めていること、②屋根には切妻造、寄棟造がみられ、近代に出現したマンサード屋根はみられないこと、③窓は縦長の窓枠取りで、上下に開閉する形式であること、④煉瓦造建物はイギリス積みによりレンガ積みがなされていること、が指摘できる。

#### ② 外周施設(図21~24)

岡山駐屯地の外周にはすべて土塁がめぐらされていた(図18破線部)。この土塁は各部隊の駐屯区域を区画したり、将校集合会所や弾薬庫を区画するものでもあった。兵営に出入りするための門はこの土塁を切って設けられた。それぞれの部隊の駐留区域に表門が設けられたほか、裏門や通用門がいくつか設けられていたようである。

i) 門　　門柱がこされている門は、山砲兵第二大隊(聯隊)表門<sup>18</sup>(現、理学部南東入口)、歩兵第十聯隊表門(現、南宿舎入口)、歩兵第十聯隊通用門<sup>19</sup>(現、農学部農場西)、広島陸軍兵器補給廠北倉庫第一通用門(現、教育学部南東)の4ヶ所である。また、文献等に掲載された写真によって門柱を確認できるものに、第十七師団司令部前門柱がある<sup>20</sup>。これらの門のうち、陸軍使用段階に撮影された写真がこの第十七師団司令部



門(左) 上：歩兵第十聯隊表門（現、南宿舎）門柱(右) 左上：歩兵第十聯隊表門西側門柱  
中：歩兵第十聯隊通用門？（現、農学部）  
下：山砲兵第二大隊表門（現、理学部）  
右上：歩兵第十聯隊通用門？南側門柱  
左下：山砲兵第二大隊表門東側門柱  
右下：広島陸軍兵器補給廠岡山文教北倉庫第一通用門

図21 現存する門と門柱

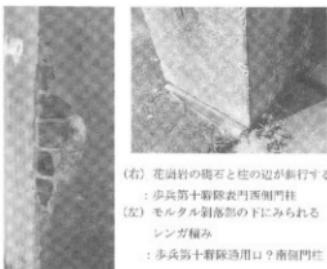
表門、歩兵第十聯隊表門では3本の門柱が立てられており、本来、門にはいずれも3本の門柱がたてられていたとみられるが、現在では3本の門柱を有する門はない。

門柱にはレンガ積みのものと、モルタル塗りのものがある。レンガ積みの門柱は、山砲兵第二大隊（聯隊）表門にのこっている。その他、文献に掲載されている写真によって素材を確認できるものに、第十七師団司令部表門、歩兵第五十四聯隊（第十七師団期）表門がある。現存している山砲兵第二大隊（聯隊）表門の門柱は、高さ約240cm、一辺約70cmの断面正方形の四角柱である。正方形の花崗岩の礎石の上に小口積みによってレンガを積み上げていく。レンガを2段積んだのち、花崗岩の薄い石板を挟んでその上に再びレンガを2段積む。最上部は数段の凹凸によって装飾を施した花崗岩の切石をのせる。天井部は緩い傾斜で寄棟状に加工している。なお、頂部には金属製のボルト3本がのこっており、本来はこの上に照明装置が取り付けられていたのであろう<sup>30)</sup>。なお、写真で確認される第十七師団司令部表門、歩兵第五十四聯隊表門のレンガ造の門柱の基本的なデザインは、現存する山砲兵第二大隊（聯隊）表門と同様である。これらの部隊はいずれも1907（明治40）年の第十七師団創設期のものである。したがって第十七師団が創設された1907~08（明治40~41）年に作られた門柱はレンガ造りのものであったとみることができよう。

モルタル塗りの門柱には、歩兵第十聯隊表門門柱、歩兵第十聯隊通用門門柱、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫第一通用門の門柱がある。そのうち、歩兵第十聯隊通用門に立つ門柱では、一部モルタルが剥落しており、その部分からレンガがのぞいている（図22左）ことから、当初はレンガ積みの門柱であったものをモルタルで塗ったことが明らかである。また、歩兵第十聯隊の表門の門柱をみてみると、最下部に花崗岩製の礎石がみられ、その上にモルタル塗りの門柱がのる構造となっている（図22右）。しかし、モルタル部分は下部の花崗岩の礎石よりも大きく、また、モルタル塗り門柱の底辺と花崗岩の辺が平行していない。これは最下部の花崗岩の礎石とその上位にみられるモルタル塗りの部分が一連の工程のもとに製作されなかつたこと、すなわち、モルタルが後から塗られたことを示すと考えられる。

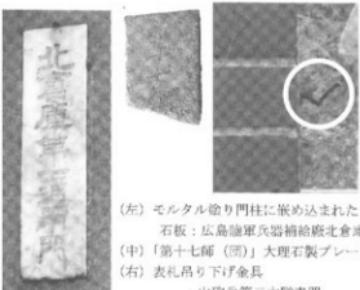
なお、レンガ造りの門柱のうち、歩兵第五十四聯隊の表門がレンガ造りの門柱であったことは先述したが、この門は第十七師団廃止後に姫路から転営してきた歩兵第十聯隊の表門として引き継がれた。現在のこっている門柱の剥落部からレンガ積みがのぞくことや、礎石とモルタル塗り施工とのズレが生じたことは、第十七師団廃止に伴う部隊の入れ替えに起因すると想定する。すなわち、モルタル塗りの門柱は、第十七師団廃止後に転営してきた歩兵第十聯隊によって塗られたものと考えるのである。広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫第一通用門についても、1925（大正14）年以降の部隊配置の再編にともなって、兵器廠関連施設が津島北地区に配されることから、歩兵第十聯隊と同様、モルタルで塗り直されたり、新たに立てられた門柱とみられる。

門柱にはそれぞれの部隊名や施設名を記した表札が掛けられたり、石板が嵌め込まれたりしていったことが現存する門柱の痕跡や写真からうかがえる（図23）。レンガ造の門柱である山砲兵第二大隊正門の門柱には表札を掛けられたり、石板が嵌め込まれたりしていったことが現存する門柱の痕跡や写真からうかがえる（図23）。レンガ造の門柱である山砲兵第二大隊正門の門柱には表札を掛けられたり、石板が嵌め込まれたりしていったことが現存する門柱の痕跡や写真からうかがえる（図23）。



(右) 花崗岩の礎石と柱の辺が剥むける  
：歩兵第十聯隊表門西側門柱  
(左) モルタル剥落部の下にみられる  
レンガ積み  
：歩兵第十聯隊通用口？南側門柱

図22 モルタルを上塗りした門柱



(左) モルタル塗り門柱に嵌め込まれた  
石板：広島陸軍兵器補給廠北倉庫  
(中) 「第十七師団(西)」大理石製プレート  
(右) 表札吊り下げ金具  
：山砲兵第二大隊表門

図23 嵌め込み式石板と吊り下げ金具

けるための金属製フックが埋め込まれている。広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫第一通用門の門柱には石板が嵌め込まれている。第十七師団司令部の置かれた区画に位置する津島閏大道跡第27次調査（創立五十周年記念館）地点周辺において採集された「第十七師（團）」大理石製プレートは、第十七師団廃止時に破棄されたものとみられるが、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫南東の通用門門柱にのこされた「北倉庫第一通用門」と記された石板と幅や白抜きに彫り出す文字の彫り方が類似することから、門柱や建物に嵌め込まれた石板であったと考えられる。

ii) 土壘（図24上） 土壘は師団駐屯地を全周するように設けられていたが、現在は津島北地区の南辺（約800m）と工兵第十聯隊将校集会所（現、文・法・経済学部南東）の区画（東辺40m、南辺51m、西辺46m）、津島北地区西辺の一部（約30m）に、津島南地区では歩兵第十聯隊将校集会所（現、津島宿泊所）の区画のうち、南辺（約40m）のみにのこされている。土壘のほとんどはコンクリートブロック塀や金網フェンス等に造りかえられている。比較的土壘がのこっている津島北地区の南辺においても、周辺に盛土が施されたり、土砂が流失したことなどにより、高さを減じているとみられ、旧状を完全にとどめている部分は少ないと考えられる。現在、最も良好に残存しているのは、津島北地区南辺のうち、東側100m前後と工兵第十聯隊将校集会所の西辺、南辺である。断面形は頂部幅0.5m前後、基底部幅約2.5~3m前後、高さ0.8~1m前後の台形状を呈している。

土壘が門や出入口によって途切れる部分では、端面を台形状に組んだ石組によって飾っている。これは山砲兵第二大隊正門、工兵第十聯隊将校集会所東側出入口で確認される。また、土壘はのこされていないものの、歩兵第十聯隊西側通用門の門柱脇にも台形状の石組がのこされている。第十七師団期の司令部建物を撮影した写真<sup>12)</sup>にも同様の構造物が写っており、駐屯地造成当初からの構造物であったと考えられる。

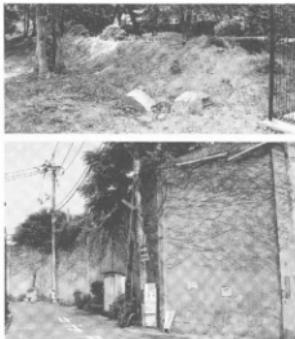
iii) コンクリート塀（図24下） 津島北地区南東隅（現、教育学部）に構築されている。高さ約5mのコンクリート塀で、周囲の景観のなかでは異彩を放つ。法界院駅からの引込線によって運び込まれた資材の荷解き場を隠すための目隠し塀であったとも伝えられている。法界院駅からの引込線の設置が1934（昭和9）年であるため、そのような目的で構築されたとするならば、1934年前後の構築ということになろう。コンクリート塀の西端には広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫第一通用門の門柱がのこっており、配置図にのこる引込線からの位置関係、門・通路・倉庫群の位置から考えても荷解き場の目隠し塀であった可能性は高いと考えられる。

### ③ 庭園（図25）

庭園は歩兵第十聯隊将校集会所（現、津島宿泊所）、工兵第十聯隊将校集会所（現、文・法・経済学部）の区域内に設けられたものである。なお、歩兵第十聯隊将校集会所内の庭園については、現在も岡山大学津島宿泊所として利用されているため、庭園の手入れが行われており、どの程度当時の状態をとどめるものか判然としない部分もある。ここでは測量調査を実施している工兵第十聯隊将校集会所庭園について詳細にみておきたい。

工兵第十聯隊将校集会所の庭園は、文・法・経済学部の南西に位置しており、これについては本センターが1997年に測量調査を実施した。測量調査の結果、ほぼ50m四方の範囲を土壘で区画し、東辺の北寄りに将校集会所への出入口が設けられる。土壘で区画された範囲には北半に将校集会所、南半に庭園が配置される。築山や池、石組は庭園の西側に寄せてつくられており、東半は構築物の配されない空間となっていたようである。

築山上には「日支事変出征記念」の文字が刻まれた石燈籠が立てられているほか、3塊の立石群がみられる。



上 壁（上）コンクリート高塀（下）

図24 外周施設

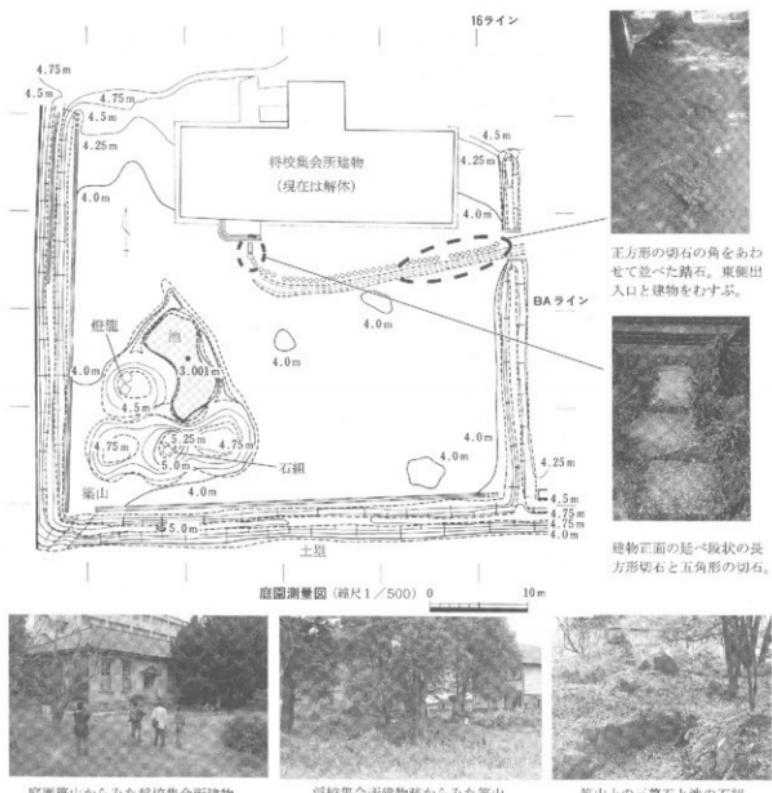


図25 工兵第十聯隊將校集会所と庭園

これらの立石群は、石の正面となる平面を将校集会所建物の方向に向けており、建物からの観賞を考慮した配置と考えられる。そのうち、中央の石塊がもっとも大ぶりの石を用いており、大小2石の立石の側縁を接して立て並べ、その前面に平石を配置している。この中央立石群の両脇斜め前方2ヶ所にはやや小ぶりの立石を配している。これらの3塊の立石群のうち、中央の立石群を1塊の立石とみたてた場合、その配置や、庭園の様式から推測すると、三尊石組として配されたものとみられよう。したがって、この庭園は築山・池・石組の要素を備えた「築山林泉式」庭園の様式に則って作庭された日本庭園であると評価できる。

#### ④ 記念物（図26・27）

駐屯していた各部隊や施設が、出征等の記念に建立した記念物として、下記の3基が現存する。

- 1) 軍人勅諭下賜五十周年記念碑　広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫事務所棟前（現、教育学部西）にのこる。事務所棟は既に取り壊されており、現存しない。1932（昭和7）年、軍人勅諭が下賜されて50周年の記念と

して、岡山兵器支廠の職員が建立した石碑である。最上部には龜身をかたどった石造物がのせられており、「勅諭御下賜五十周年記念」の文字が刻み込まれる。また、前面には軍人勅諭の精神を示す「忠節・禮儀・武勇・信義・質素」の5カ条を刻んだ石板を嵌め込んでいる。

#### ii) 「満州事変」出征記念石碑

歩兵第十聯隊将校集会所（現、津島宿泊所）庭園内にのこる。庭園の南

西に築かれた築山の東部にたてられた石碑である。石碑の表には「苦即快」、「歩兵第十聯隊長 人見順士（花押）」、石碑の裏には「自昭和七年四月至全九年三月間 満州事変ニ従軍中聯隊將兵ノ日夜遵守奮戦セル訓言ナリ 茲ニ記シテ記念ト為ス 昭和九年三月歩兵第十聯隊長 人見順士（花押）」の文字が刻まれる。

iii) 「日支事変出征記念」石燈籠 工兵第十聯隊将校集会所（現、文・法・経済学部南西）庭園内にのこる。庭園の南西に築かれた築山の西部にたてられた石燈籠である。現在、燈籠の籠部分は脚部の脇に下ろされた状態でのこされている。燈籠脚部には「日支事変出征記念」、「寺尾部隊」、「昭和十三年五月」の文字が刻まれている。

#### ⑤ その他（図28）

工兵第十大隊（聯隊）橋梁演習場 工兵第十大隊（聯隊）橋梁演習場は、工兵第十大隊（聯隊）敷地の西側に位置する。現在の文・法・経済学部駐車場北側にある。

現在、煉瓦造の橋台部分と橋脚2本のがのこっている。橋脚は倒れているが、立った状態の橋脚が写る写真が掲載されている文献もある<sup>13)</sup>。背後には1982（昭和57）年に建てられ、現在も使用されている文・法・経済学部講義棟の建物が写っており、津島地区が岡山大学に引き継がれた後も水く旧状をとどめていたことがうかがわれる。いつの時期に倒されたのかは明らかではない。

なお、工兵第十大隊（聯隊）橋梁演習場については、本書第1章第1節において詳細な報告を行っている。

### b. 津島地区周辺にのこる戦争関連施設

#### ① 練兵場

岡山大学津島地区の南約300mに位置する岡山県総合グラウンドは、

第十七師団設置にともない練兵場として造成されたものである。造成は突貫工事で行われ、事故や疲労で死者が



図26 記念碑等の石造物  
 (左) 勅諭御下賜五十周年龜身望記念碑  
 (中) 歩兵第十聯隊将校集会所庭園内  
 「満州事変」出征記念石碑  
 (右) 工兵第十聯隊将校集会所庭園内  
 「日支事変」出征記念石燈籠



図27 記念碑に刻まれた文字  
 (左) 勅諭御下賜五十周年龜身望記念碑に刻まれた  
 「勅諭御下賜五十周年記念」の文字  
 (上) 勅諭御下賜五十周年龜身望記念碑に刻まれた  
 勅諭御の精神を示す5ヶ条  
 (左下) 歩兵第十聯隊将校集会所庭園内  
 「満州事変」出征記念碑  
 (下左) 工兵第十聯隊将校集会所庭園内  
 「日支事変」出征記念石燈籠

図27 記念碑に刻まれた文字



図28 工兵第十大隊（聯隊）  
 橋梁演習施設

出たことが石碑に記されている。この石碑は現在総合グラウンド内に移築されている。岡山練兵場は、第十七師団設置時には140,988坪の広さを有していた。戦後、一時連合軍に接收された。連合軍の撤退後は国有財産に編入された。

### ② 岡山偕行社（図29上）

岡山偕行社は、岡山県総合グラウンド内に位置している。現在の位置は総合グラウンドの改修にともない、二度にわたって移築されたものであり、本来は敷地の南東に位置していた。

偕行社は旧陸軍の相互扶助や親睦事業を行った団体で、岡山偕行社は、1910（明治43）年に建てられた木造二階建ての洋館である。将校などの会合にも使われたが、軍用品販売や将校団員への日用品配布などを事業とした施設であった（岡山市史編集委員会1955）。

### ③ 騎兵第二十一聯隊将校集会所（図29下）

現在、津島新野公会堂として使用され、地域社会の中核施設となっているが、もとは騎兵第二十一聯隊の将校集会所建物であった。1925（大正14）年、第十七師団の廃止により、騎兵第二十一聯隊も廃止された。聯隊の将校集会所は新野町内会に払い下げられ、移築されたものである。屋根の葺き替えや窓の補修等があるが、ほぼ外観をとどめているようである。

### ④ 対空陣地（図30）

津島地区の北側に控える半田山山塊から南に伸びる尾根上に対空陣地が2ヶ所確認されている。いずれも尾根上に築かれた古墳に作られている（近藤2000）。

#### i) 一本松古墳

一本松古墳は、津島地区の北東に位置する標高約82mの尾根上に築かれた墳長約65mの前方後円墳である。対空陣地の痕跡である窪みは後円部に3ヶ所、前方部に1ヶ所確認されている。いずれも径4～5m、深さ1m前後である。窪みには側面から続く壘塹状の溝が掘削されている。

#### ii) 七つ塹古墳群

七つ塹古墳群は、津島地区の北西に位置する標高約60～70mの尾根上に築かれた古墳群である。対空陣地とみられる窪みは、墳長約45mの前方後方墳である1号墳の後方部に1ヶ所、前方部1ヶ所と、円墳である3号墳に1ヶ所の計3ヶ所に確認される。後方部墳頂の窪みは、現状で約6×4.5m、深さ約1.5mで、北に延びる壘塹状の溝を取り付く。前方部の窪みは、現状で径約3.4m、深さは数十センチメートルとされる。壘塹とみられる溝を取り付く。3号墳の窪みも1号墳前方部のものと同規模である。

### c. 発掘調査によって確認された駐屯地完成前の津島地区

これまでに岡山大学津島地区とその周辺にこなされている戦争関連施設の概要を述べてきた。岡山大学津島地



(上) 岡山偕行社  
(下) 騎兵第二十一聯隊將校集會所  
(現: 津島新野公会堂)

図29 駐屯地周辺の陸軍関連建物

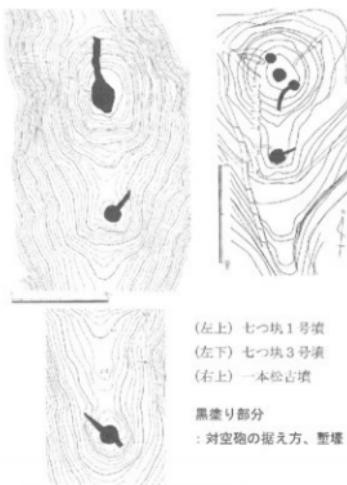


図30 古墳に築かれた対空陣地（縮尺1/1000）

区では、現在までに29回の発掘調査を実施しており、駐屯地完成前の津島地区の状況がわかる造構が検出されている。ここでは発掘調査の成果から陸軍の駐屯地が完成する直前の岡山大学津島地区の状況をみておきたい。

### ① 耕地（図31）

駐屯地造成以前の地形図ではこの一帯は耕地として記録されている。

発掘調査においても、ほとんどの調査地点で畠の歎が検出されている。

水田ではなく、畠の歎がほぼ全域で検出されるのは、岡山平野では当時も二毛作を行っていたと考えられること、駐屯地造成工事は1907（明治40）年8月から着手しているが、5月から土地の収用が開始されたとされているので、前年の作付けによる作物を収穫した後の農作業は放棄され、田起こし等の農作業を行わなかつたためと考えられる。

### ② トロッコ軌道（図31）

津島関大遺跡第12次調査地点（附属図書館新館）において、畠の歎を切って南北一北東の方向に延びているトロッコ軌道が検出されている。軌道の幅は2.5m、枕木の間隔は1.5~2mである（岩崎2003）。駐屯地の造成は用地周辺の山塊を切り崩して約1mの土盛りを行うものであり、「山陽新報」大正14年3月28日夕刊の記事の中に「今の工兵隊兵営の東北に所在した成田山は跡形もなく切り崩されて消え失せた」<sup>10)</sup>とある（岡山市百年史編さん委員会1994）。そのほか、練兵場の造成には西の京山に統く日焼山を切り崩して水田を埋め立てたとの記載（平井2000）もあり、これらの造成土をトロッコで運搬した痕跡が検出されたものであろう。なお、半田山から南に延びた尾根の残丘が津島地区内に現在ものこっているが、発掘調査で検出されたトロッコ軌道はこの残丘方向に延びていることも推測される。記録にのこされた山塊以外からも採土を行っていたと考えられる。

## d.まとめ

岡山大学津島地区が旧日本陸軍第十七師団の駐屯地であったことは、これまでにもさまざまなかたちで紹介されてきた。その多くは記載がなされた時点での残存建物や施設の紹介と一覧表といったかたちのものであった（西川・角田1996、平井2000）。それは駐屯地内部の全体像がわかる資料がなかったことや、急速にすすむ開発によって陸軍関連施設が失われていったことによるものであろう。

小文では、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターで継続的に続けてきた陸軍関連施設の測量調査や実測図作成などの記録作業の成果に加え、岡山大学事務局に保管されていた『所管換面書』の内容や取り壊し前の建物写真などの記録をもとに、第十七師団駐屯地の全体像がわかる資料を提示するとともに、現状で確認されるすべての施設について網羅し、紹介することを目指した。今回の集成作業や踏査の結果として、1949（昭和24）年に岡山大学に引き渡される以前に存在していた施設の全体像を知ることができるようになったこと、2006年現在でどの施設がどの程度のこっているかを明らかにできたことを最大の成果とすることができよう。さらに、レンガ積み工法やレンガ自体の特徴、門柱や庭園の構造についても新たな見知を得ることができた。

今日、岡山大学津島地区とその周辺については都市化が進行し、さまざまな施設が再開発され、戦前の建物や施設は急速に失われている。現在ものこされている施設については、今後も記録作業を継続し、さらなる調査・研究を継続する必要があろう。

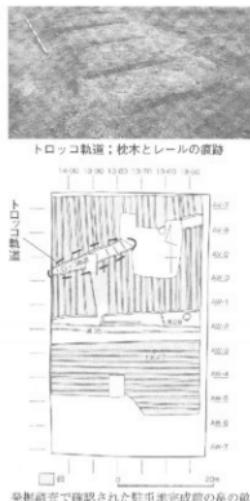


図31 畠の歎とトロッコ軌道  
(縮尺1/1000)

## 註

- (1) これまで、工兵第十聯隊部隊集会所施設（1997年；既報告）、工兵第十聯隊部營南辺土畠の一部（2000年）、工兵第十八聯隊（聯隊）櫛架演習施設（2005年；本書第1章第1節）、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫南辺土畠の一部（2006年）、山砲兵第二大隊表門（2006年）の面積調査およびレンガ製構造物の記録を行っている。
- 野崎貴博1999「文・法・経済学部南庭園面積調査：『岡山大学構内遺跡調査研究年報15』」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.12-14
- (2) 「所替換清告」において、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫の煙丸造平屋建で建物2棟が木造平屋建てとされているが、これは現存建物が煙丸造平屋建であるので、記載の誤りであろう。この2棟は本造から煙丸造に読みかえて建物の棟数を出した。なお、その他の建物については、写真として記載されているものも含め、現状で知りうる限りのものは記載と照らし合せた。
- (3) なお、第十七聯隊・第三十三旅団・岡山聯隊区の各司令部が入っていた建物は、長く岡山大学事務局として使われてきたが、新事務局棟の併設とともに、建物正面中央の部分のみ移築保存し、両翼の大半は取り壊しとなった。また、司令部建物正面玄関の右に置かれていた衛生部（現、岡山大学情報展示室）は2006年で登録有形文化財（建造物）として登録された。
- (4) 文部省考古学資料館として使われている煙丸造建物は、一部二層建てとなっているが、これは岡山大学に引き渡された後の増築であり、本来は平屋建てであった。
- (5) イギリス語みは外側に小口のみを向ける段と長手（長辺）のみを向ける段とを交互に積み上げる方法である。
- 藤井正一1966「建材の実際知識」, pp.100-103
- (7) 工兵第十八聯隊（聯隊）の櫛架演習施設については、工兵第十八聯隊の軽営が1925（大正14）年で、当初は勝地屯東南の工兵第十七大隊跡地を兵営としていたことから、レンガの規格が統一された軍と工兵第十八聯隊が敷地北西部を兵営とする時期とのズレも想定されるところであり、レンガの法量をもって直ちに施設の年代と結びつけることはできない。また、広島陸軍兵器補給廠岡山支廠北倉庫通用口？としたレンガ造門柱一対については、1949（昭和24）年段階の現状では門を確認できない。他の門柱とも大きさや基礎の構造が異なっており、このレンガ造門柱は塗られた時代や焼成の造作小かきについても現時点では確定できていない。
- (8) 津島北地区の南北ほぼ中央に位置しているが、この地区は第十七聯隊がおかれていた明治・大正時代には山砲兵第二大隊（後に聯隊）の兵営にあたり、山砲兵第二大隊の表門であるとみられる。
- (9) 現在、農学部農場の西に位置する門である。「歩兵第十一聯隊史」に掲載された歩兵第十一聯隊の兵営を記録した図面には兵営西側に出入りするための門や間に通じる通路は示されていない。第十七聯隊開闢には、この区域は歩兵第五十四聯隊が兵営としてきたが、まさに西に歩兵第二十一聯隊の兵営が置かれており、西側に通じる門を設置する必要があったとも考えられるが、歩兵第十一聯隊が軽営してきた際には歩兵第二十一聯隊は廃止され、歩兵兵営の西側には新たな部隊が入らなかったため、歩兵第十一聯隊によって塗がれた可能性がある。
- (10) 歩兵第十一聯隊史刊行会1974「歩兵第十一聯隊史」
- (11) 第十七聯隊開闢部（『京山物語』, p.796）、歩兵第五十四聯隊兵営（『歩兵第五十四聯隊史』, p.23）の表門に立てられた門柱の上にも球状の防雨装置が取り付けられている。同様の装置が取り付けられていたことは想像にかたくない。
- (12) 高橋忠敏2003『京山物語』, p.796
- (13) 「津島のむかし」編集委員会1992『津島のむかし』, p.53再写真
- 04 岡山市百年史編さん委員会1994『岡山市百年史』資料編1, pp.813-814

## 参考文献

- 岩崎志博2003「近代：『津島岡人遺跡11』」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16号, pp.262-265  
 岡山県立図書館1964『岡山県郷土部隊史』  
 岡山県史編纂委員会1963『岡山県史』第十五巻：近代 I  
 岡山市史編纂委員会1953『岡山市史』：戦災復興編  
 岡山市百年史編さん委員会1994『岡山市百年史』資料編 I  
 金井安子2002『建築資材（煙丸）・工具・器具』『しらべる戦争遺跡の事典』, pp.355-358  
 佐藤洋一・村播2003『戦争遺跡建造物の見方』『しらべる戦争遺跡の事典』, pp.225-231  
 近藤義郎2000『古墳に作られた対空陣地の遺跡』『岡山の記憶』第2号, pp.58-61  
 「津島のむかし」編集委員会1992『津島のむかし』  
 小原忠義2000『京山物語』  
 西川宏・角田茂1996『四山山内に残る戦争の痕跡』『明日への文化財』38号, pp.30-31  
 野崎貴博・小林青樹1999『岡山大学構内における陸軍閏連施設の調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報15』, pp.12-16  
 平川泰男2003『第一七聯隊開闢遺跡』『しらべる戦争遺跡の事典』, pp.52-53  
 藤井正一1966『建材の実際知識』  
 歩兵第五十四聯隊史刊行会1989『歩兵第五十四聯隊史』  
 步兵第十聯隊史刊行会1974『歩兵第十聯隊史』

## 図出典

- 図18 岡山大学事務局保証図より筆者作成 図25 組1次航より引用、一部改変 図30 七つ丸1・3境：七つ丸古墳群発掘調査用  
 1987『七つ丸古墳群』より引用、一部改変、一本松古墳：近藤義郎1986『一本松古墳』『岡山県史』第十八巻より引用、一部改変 図  
 31 山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡人遺跡11』より引用、一部改変

## 第2章 鹿田遺跡の調査研究

### 第1節 立会調査の概要

#### 1. 調査の実施状況

鹿田地区において2005年度に実施した立会調査は、事業数では3件である(図35、表5)。そのうち、医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事に伴う立会調査では、掘削が弥生・古墳時代に相当する層まで達していったため、その成果について概要を報告する。

#### 2. 医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事に伴う立会調査

(施山 DH～DJ18、DJ19)

##### a. 調査の経過と調査区の位置(図32・33)

本調査地点は鹿田地区の南東隅にあたる。周辺の発掘調査地点には鹿田遺跡第3次調査地点<sup>④</sup>（保健学科棟；山医療技術短期大学部）がある。また、鹿田地区東辺<sup>⑤</sup>および南辺<sup>⑥</sup>では、護岸工事に伴う立会調査を行なっており、これまでにも地形復原に有用なデータを蓄積してきているが、南東隅にあたる本調査地点の外周には護岸工事は達してはおらず、様相は不明なままであった。

工事は医学部変電所に学外から高圧ケーブルを引き込むためのものであり、今回の掘削は地中支柱物の有無をさぐる目的で実施されたものである。したがって、変電所建物と東側ピット周辺が掘削の対象となつた。

調査は工事日程にあわせ、2006年3月7、17日に実施した。

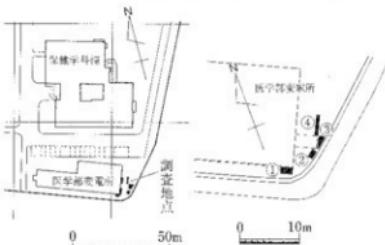


図32 調査区位置図  
(縮尺 1/3000)

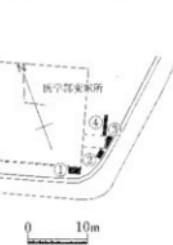


図33 調査地点配置図  
(縮尺 1/1000)

##### b. 調査の概要(図33・34)

掘削は医学部変電所のピットを中心とする建物の周辺で実施され、そのうち4地点で包含層を確認した。層序 1層は造成土である。2層は明黄茶褐色砂質土である。これ以下の上層は各調査地点によって異なっているが、南側の①・②地点、北側の③・④地点が比較的近似した堆積状況を示している。以下では南側の①・②地点、北側の③・④地点に分けて堆積状況をみていきたい。なお、各層の時期については、遺物がほとんど出土していないため、周辺の調査成果を参考としている部分もある。

南側の①・②地点の3層は明灰黄褐色砂質土、4層は明灰灰色粘土、5層は明灰灰色弱砂質土で、地形がやや下がる部分に堆積した土層である。6層は明黄褐色砂質土、7層は明灰褐色砂質土、8層は灰褐色土で、出土した土器の細片から、古代か中世の土層と考えられる。

北側の③・④地点については、2層の下位は、9層が暗青灰色粘土、10層が青灰色～明灰灰色粘土、11層が明茶褐色粘土、12層が明灰褐色粘土である。13層以下は粗砂と粘土が互層となる。13層は明橙灰～灰色砂～

粗砂、14層は暗灰色粘土、15層は淡黄灰色砂、16層は灰色粘土である。このうち、10~12層についてはしまりが良く、しっかりとした土層との印象をうけるのに対し、13~16層は河道や溝の堆積物であると推測される。

**地形** 南側の①・②地点は微高地の堆積層とみられるのに対し、北側の③・④地点は湿地状の堆積や河底や溝の堆積物と考えられる粗砂が厚く堆積しており、鹿田地区の南東隅には微高地と河道が存在していることが想定される。

### c.まとめ

鹿田遺跡第3次調査地点（保健学科棟）では河道が通ることが確認されており、今回の調査地点で確認した地形は、この河道に開通する低位部と河道の南岸にあたる微高地であると推定される。

これまでの発掘調査、立会調査の成果とあわせ、鹿田地区南東における微高地や河道のひろがりを推定できるようになってきたといえよう。  
(野崎)

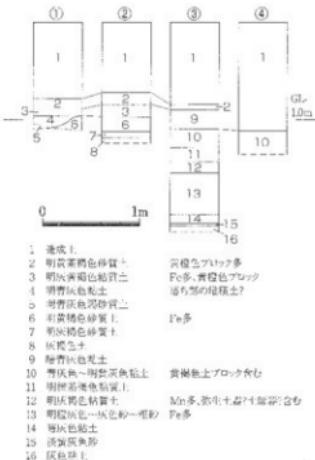


図34 土層断面図（縮尺1/60）

### 註

- (1) 山本徳世1990「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4号
- (2) 横田美香2001「鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』, pp.34~37
- (3) 山本徳世1987「鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報4』, pp.18~19

表5 2005年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	調査実績	所見	調査名称	調査期間	標的深度 (GL.m)	内容
1	立会	AI06	○	岡学部施設園芸木竹サンプル採取作業	4.7, 8	1.5m	近代層疊
2	立会	DG-DJ05-69	○	テニスコート改修工事	2.10, 14	0.9~1.0m	堆積：内、一部 CL-0.8m で灰褐色粘質土確認
3	立会	DH-DJ08, DJ19	○	岡学附属電気ビル・同窓生駐車場ブルボン工事	3.7, 17	1.1~2.5m	一部で黒土、近代層疊

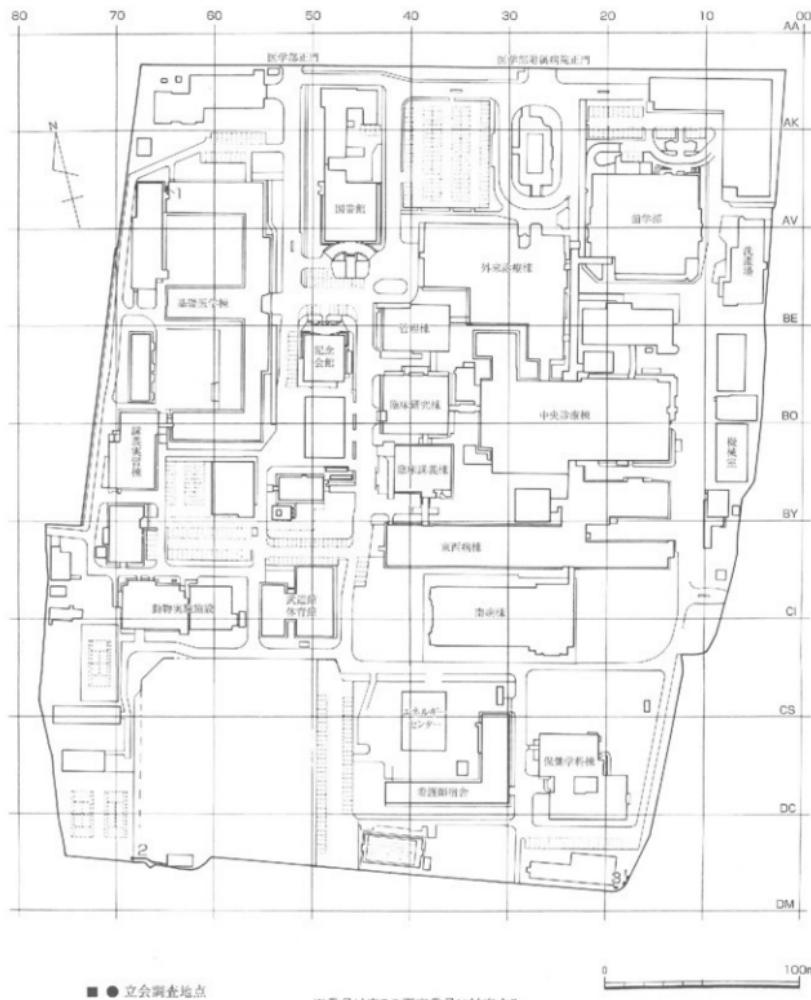


図35 2005年度の調査地点【2】—鹿田地区—（縮尺1/2500）

## 第2節 鹿田遺跡の研究

### 1. 鹿田遺跡の古代・中世の井戸について

#### a. はじめに

鹿田遺跡の井戸については、弥生時代から古代のものを対象として、すでにその形態と遺物出土状況に検討が加えられている（山本1988）。しかし、現在はその時点から約20年が経過しており、中世を中心に多くの井戸の資料が蓄積されている。そこで、本考察では井戸の形態、規模、遺物の出土状況を軸として、鹿田遺跡の古代・中世の井戸について再整理を試みたい。なお、表6はこれまで報告された井戸を、上記の検討内容にそってまとめたものである。以下ではこれをもとに記述を行う。

#### b. 井戸の形態と規模

井戸の形態については、断面形態から大きく二種に分類されており、上部が鉢状となるY字型、上面から下面までが円筒形であるU字型に分かれる（山本1988）。平面形態もまた、楕ね方形と円形の二種に分かれる。

井戸枠はY字型にのみ認められ、U字型にはない。また、丸太削り貫き材を組み合わせた井戸枠が伴うのは1次調査地点井戸20、1次調査地点井戸4といった10世紀頃の井戸までであり（図36-2・3）、それ以降は、板を組み合わせた方形の井戸枠（以下、方形立板組井戸枠）と、しばしば曲物を井筒とする素掘りの井戸のみとなる（図37）。なお、平向形態が方形のものは、発掘時に井戸枠がなくても、部材がしばしば残存していることから、当初は方形の井戸枠を伴っていた可能性が高い。

鹿田遺跡でみられる丸太削り貫き組み合わせ井戸枠は、古墳時代以降、広く西日本にみられる（鍛方2003）。しかし、古代の岡山平野及びその周辺では井戸自体が少なく、備前国府津に比定される百間川米田遺跡、備中國府津に比定される川入遺跡などで確認される程度である。ただし、8~9世紀の川入遺跡では丸太削り貫き組み合わせ井戸枠と方形縦板組井戸枠（図36-4・5）、7世紀の米田遺跡では隅柱をもつ曲物を重ねた井戸枠というように（図36-1）、鹿田遺跡を含め少ないながらも多様な状況を呈している。堅固さという点では米田遺跡例は疑問であるが、この時期の井戸枠はどれも構築に手のかかるものであり、安定的に使用する土地を定め、井戸を永く使用する意志の表れともとれる。鹿田遺跡の場合は、藤原摂関家の荘園であることと関連するのだろう。

鹿田遺跡1次調査地点の11世紀末の井戸21は、部材が抜き取られているものの、方形縦板組の井戸であり（図37-1）、これは鹿田遺跡の以降の井戸枠形態に連続する。古代においても川入遺跡例があるが、中世には岡山平野及びその周辺でもこの形態の井戸が多い。古代の井戸の数量が少ないため、中世の井戸との連続性は不明瞭であるものの、同じ木製井戸枠とはいえ、方形縦板組井戸と10世紀頃までの削り抜き式のものとは、平面形態・製作技術とともに連続性は認め難い。なお、中世の井戸枠の減少傾向については、13世紀前後に井戸自体が急増するので、労力やコストの問題からその使用が減少するという理解も可能であるが、明確にはしない。

#### c. 井戸からの出土遺物と出土位置

井戸からの出土遺物には、実用具が落ちたものと祭祀に使用されたものの両者がある。例えば、薺串は、その使用方法の推定があるように、明らかな祭祀道具といえるが（山本1970、鍛方2003ほか）、土器は、穴形で安置されたもの<sup>3</sup>以外の土器片などは、どこまでが祭祀に関係するか不明瞭である。刀子は実用品ではない木製のものも含めて井戸からしばしば出土するため、祭祀遺物として扱われているが（北田2000ほか）、横櫛なども含め、文献に記載がなく、近代までその風習が残っていないものは、その祭祀上の意味を知ることはできない。

表6 鹿田遺跡の井戸

\* 実測土質については、柱間に隙縫などの記載のない場合は1点のみを記す。

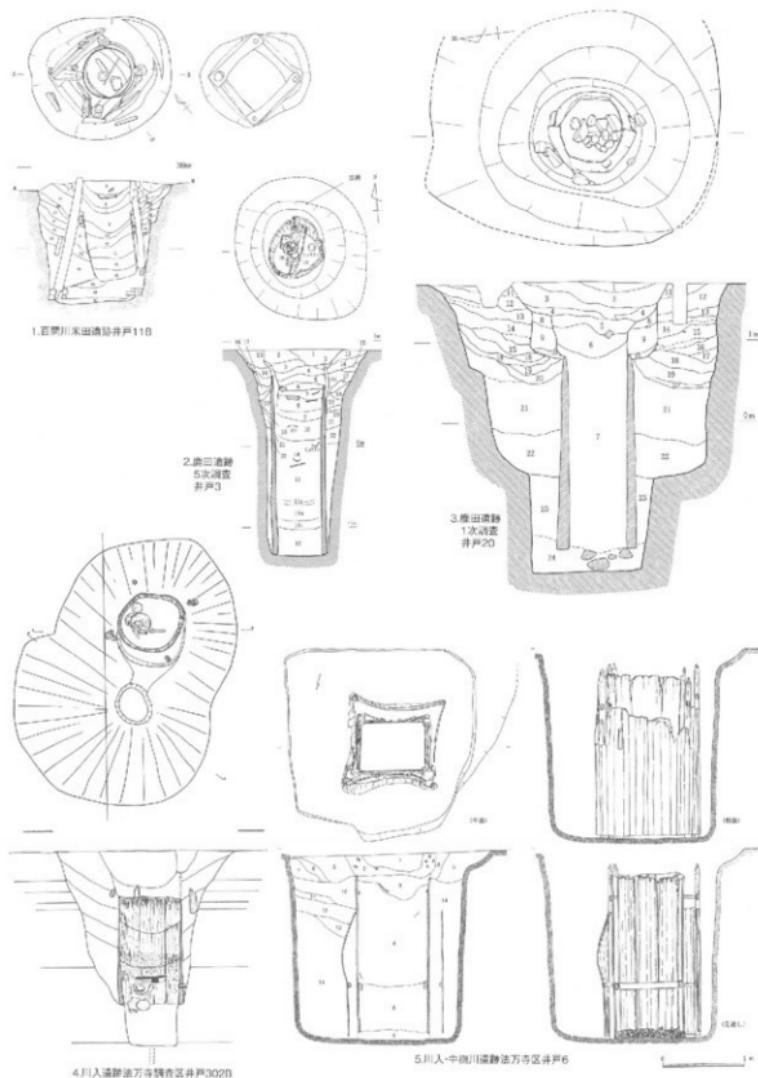


図36 広田遺跡の古代の井戸及び参考資料 (縮尺1/60)

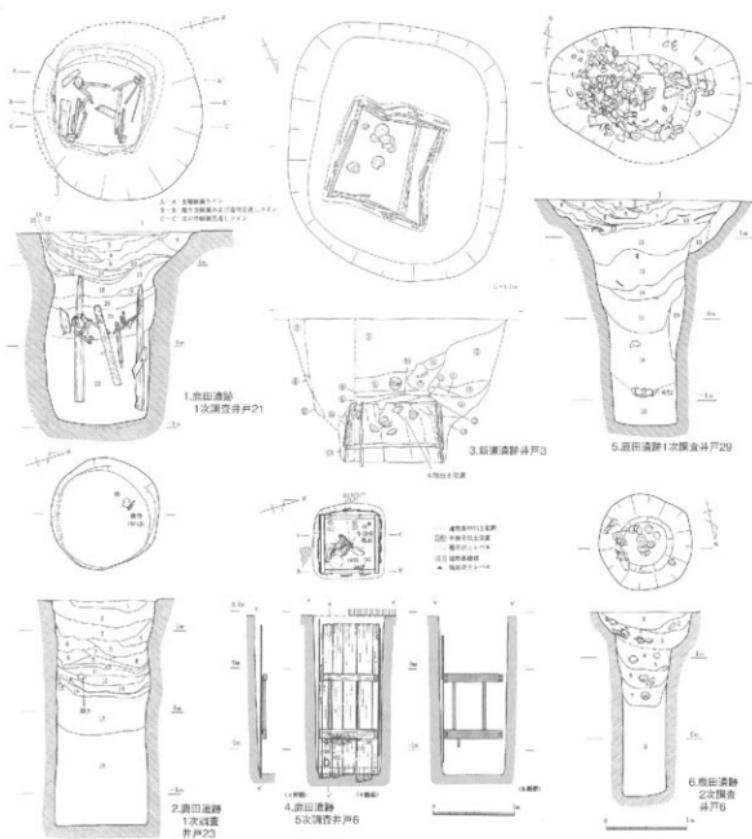


図37 鹿田遺跡の古代末～中世の井戸及び参考資料（縮尺1/60）

一方、出土頻度や出土状況から祭祀遺物の認定だけでなく、今日ではさらに祭祀の段階、つまり祭祀の意味の差異に対しても言及があり、胸見和夫、北田裕行、鍾方正樹らによって、細部は異なるが概ね3段階ほどの祭祀の区分が提示されている（胸見1992、北田2000、鍾方2003）。その内容を簡略にまとめると、第1段階が井戸完成時で、井戸底における規則的な上器や斎串の配置やまとまった上器の安置、第2段階が井戸使用時で、土器の安置、第3段階が井戸廃絶時で、動物の奉納、埋める際の竹などの「息抜き」の構築などとなる。

これらの概念上の区分は比較的明瞭であるが、遺物の出土状況からはその区分が困難である場合も多い。例えば、第1段階の祭祀は、井戸枠がある場合、斎串などが表込められた粘土や石から出土すれば、明らかに第1段階といえるが、井筒内の底に土器や斎串が四隅に置かれたりする場合は、第1段階の可能性が高いものの、厳密には使用時の第2段階の可能性もある。また、完形土器の安置は、出土位置に関わらず、第2段階と第3段階の両方

の可能性をもつ。ここではその問題の追及は出来ないが、注意だけは喚起しておきたい。

さて、以上を念頭におき、鹿田遺跡の様相をみると、都城などで事例の多い第1段階の祭祀は、古代の1次井戸20、2次井戸4が、出土状況は判然としないものの斎弔がみられる点で、該当する可能性がある。しかし、それより後代の井戸では、斎弔の性格を継承したと考えられる著状木製品（駒見1992）も少なく、井戸底からの遺物の出土も少ない。時期が新しくなるにつれて明確な第1段階の祭祀がみられなくなっていくと推測される。なお、鹿田遺跡には1次井戸22の馬、5次井戸6の牛頭の奉納といった第3段階の祭祀もみられる（図37-4）。

一方、古代の都城では、まとまった数の完形土器が井戸底に置かれるが、古代末までの岡山平野とその周辺では、8～9世紀の川入遺跡法方寺調査区井戸302Bの事例（図36-4）を除き、壺や碗などが1点安置される程度である。これに変化がみられるのは12世紀後葉であり、多数の完形土器の安置が顕著となる。土器安置が何段階の祭祀であるかは明瞭にはできないが、井戸底から井戸上層にかけて広くみられるので、内容に関わらず、祭祀の折りに奉納する道具であったのだろう。また、同じ鹿田庄の範囲に比定される新道遺跡井戸3は、大量の完形土器が安置され（図37-3）、規模も大きいが、鹿田遺跡2次井戸6は、4回に分けた安置が認められるにも関わらず（図37-6）、その上面の直径が1.2m程と小さいことから、この多数の完形土器の安置は、井戸の規模に関わりなく行われていたようである。なお、この完形土器の祭祀には古備系土師質碗が好んで使用される。

#### d.まとめ

古代の岡山平野とその周辺では、墨青土器や斎弔などの共通点は認められるものの、都城といった中央地域に類した井戸祭祀は僅かしかない。しかし、12世紀末頃以降には、近畿地方でも広くみられる壺を中心とするまとまった数量の完形土器の安置が行われ、類似した様相が認められるようになる。そして、鹿田遺跡や新道遺跡、旭川東岸の百間川米山遺跡でまとまった数の完形土器安置が認められるようになる時期に前後して、この地域では円形素掘りの井戸、方形縦板組の井戸が主体となっていく。つまり、段階的に井戸型式と祭祀が変化していくといえる。古備系土師質碗の成立も含めると、地域としてのまとまりが明瞭となりつつ、広く情報を得るような状況となったということであろうか。ただし、この地域の古代から中世の井戸型式と祭祀の連続性はまだ明瞭ではない<sup>35</sup>。今後は、西日本での全体的な傾向を視野に入れて、この問題にあたる必要があるだろう。

（中村大介）

#### 註

- (1) 山本博は完形土器を『延喜式』に記載された渡水料とみる（山本1970）。
- (2) 鹿田遺跡では、現在までに報告されたなかに11世紀前半の井戸はないが、未報告の第13次調査でその時期の可能性のある井戸が検出されている。ただし、井戸構築の連続性は認められても、井戸の形式と祭祀内容の連続性についてはなお明瞭ではない。

#### 参考文献

- 佐方正樹2003『井戸の考古学』同成社
- 北山裕行2000『古代都城における井戸祭祀』『考古学研究』第47巻第1号
- 草原孝典2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 草原孝典2006『川入・中庭川遺跡』岡山市教育委員会
- 駒見和夫1992「月井戸をめぐる祭祀－地理的事例の検討－」『考古学雑誌』第77巻第4号
- 庄岡義夫・大谷猛・枝川陽1974「川入遺跡の調査」『山陽新報緑豊版に伴う調査Ⅱ』岡山県教育委員会
- 松木武彦・山本悦重1993「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 松木武彦・山本悦重1997「鹿田遺跡Ⅳ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本 博1970『井戸の研究』絶芸舎
- 山本悦重1988「鹿田遺跡における集落構造とその後遺」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦重1990「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 吉留秀敏・山本悦重1988「鹿田遺跡Ⅴ」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山藤康平・松尾佳子・柳瀬昭彦・物部茂樹2002「白鶴川米山遺跡」4 岡山県教育委員会

#### 図出典

各報告書より引用

## 第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理

#### 1. 調査資料の整理

2005年度の調査資料の整理は、津島岡大遺跡第23・24次調査（文化科学系総合研究棟および渡り廊下）、鹿田遺跡第7・8次調査（医学部基礎研究棟・RI治療室）を中心に行い、報告書の作成に関しては、「津島岡大遺跡17」（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22回）を刊行した。

「津島岡大遺跡17」は文化科学系総合研究棟新館に伴う津島岡大遺跡第23・24次調査の成果報告書である。これは2000年度に実施した発掘調査で、縄文時代後期から弥生時代における河道の利用形態を明らかにしたものである。出土資料は豊富な地下水により遺存していた多量の木製品や杭、自然木が大半を占め、その整理作業に多くの労力を割いた。報告書には事実報告に加え、西日本では類例のない縄文時代後期の杭列、弥生時代前期の灌漑施設、一括資料を含む突帯文土器についての考察を掲載し、それぞれの課題に対して一定の方向を示した。

自然科学分析では、報告書作成にも関わるものとして、放射性炭素年代測定、樹種同定を行った。また、報告書には2000年度に分析を実施していた植物珪酸体分析、花粉分析の結果を掲載した。放射性炭素年代測定、樹種同定の分析結果については次項で報告する。

#### 2. 調査資料の分析

##### (1) 放射性炭素年代測定

本年度は6点の試料について放射性炭素年代測定を行った。いずれも津島岡大遺跡第23次調査出土資料から採取したもので、その内訳は、縄文時代の杭2点、弥生時代前期の櫛の構成材2点、突帯文土器付着炭化物1点、弥生土器付着炭化物1点である。詳細は報告書に掲載している。これらはいずれも古環境研究所で分析を行った。

表7 放射性炭素年代測定資料一覧

番号	出土品名	遺構	対象資料	分析法	分析機関	備考
1	津島岡大遺跡23次調査	河岸	土器付着炭化物	AMS	古環境研究所	「津島岡大遺跡17」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22回にて報告
2	津島岡大遺跡23次調査	河岸	土器付着炭化物	AMS		
3	津島岡大遺跡23次調査	廻	杭（桿木）	Radiometric		
4	津島岡大遺跡23次調査	廻	変形材（櫛木）	Radiometric		
5	津島岡大遺跡23次調査	廻	杭（桿木）	AMS		
6	津島岡大遺跡23次調査	廻	杭（桿木）	AMS		

AMS (Accelerator Mass Spectrometry)：加速器質量分析法  
Radiometric：放射性シンチレーションカウントによるβ線計数法

##### (2) 樹種同定

津島岡大遺跡第23・24次調査の木製品、杭、木板について、森林総合研究所、能城修一氏に樹種同定を依頼し、有益な教示を得た。また、鹿田遺跡第7次調査出土資料のうち、保存処理を外部委託した2点（表11）についても同定を行っている。

詳細な結果は、正式報告書を参照されたい。

表8 樹種同定一覧

調査名	分析機関	点数	主な材（遺構）	報告
津島岡大遺跡23・24次調査	森林総合研究所 能城修一	255	河岸（縄文・進生）	「津島岡大遺跡17」
津島岡大遺跡23・24次調査	森林総合研究所 能城修一	6	河岸（縄文）	「津島岡大遺跡17」
鹿田遺跡第7次調査	森林総合研究所	2	井戸・廻	「鹿田遺跡5」

### 3. 調査資料の保存処理

#### (1) 木製品のPEG保存処理作業

2005年11月より第7期保存処理作業を開始した。対象資料は津島廻大遺跡第23・24次調査出土品で、縄文時代後期の河道から出土した加工痕のある木片や多数の杭、弥生時代前期の堰を構成する木材等を保存処理した。杭などは、保存処理の過程での破損や、ラベルの脱落等により資料の所属が不明となることを防ぐため、目の細かいネットにラベルとともに入れた後、処理槽に投入した。保存処理開始段階のPEG濃度は40%である。なお、事前の記録作業は岡山大学の博物館実習に取り入れ、準備作業の一部については博物館実習生の協力を得た。

表10 これまでの保存処理工程

周	期間	処理内容	係理期間
第1期	1992年2月～1993年11月	鹿田遺跡第1次（昭武系配外未答付標）・第2次（NMR-CT室）	1年9ヶ月
第2期	1994年6月～1996年8月	鹿田遺跡第3次（医学部歯頬学部合体木体）・第4次（医学部歯頬学部教員配置）・第5次（即興施設修理）・津島廻大遺跡第3次（男子学生寮）・第5次（大学自然科学研究科）・第6次（牛糞利用工学科棟）	2年2ヶ月
第3期	1996年12月～1999年6月	鹿田遺跡第3・5次、津島廻大遺跡第3・6次	2年7ヶ月
第4期	1999年7月～2000年12月	鹿田遺跡第3・4次、津島廻大遺跡第3次	1年5ヶ月
第5期	2001年1月～2002年3月	鹿田遺跡第3・4次、津島廻大遺跡第3次・第9次（生体標記用工学科）・第10次（保健管理センター）・第12次（即興施設修理）・第13次（福利厚生施設会館）	1年2ヶ月
第6期	2002年11月～2004年8月	鹿田遺跡第7次（医学部歯頬学部木）・津島廻大遺跡第13次（コラボレーション・センター）・第22次（環境理工学系研究会館）	1年10ヶ月
第7期	2006年11月～（残缺中）	津島廻大遺跡第23・24次（文化科学系総合研究会）	—

#### (2) 外部委託による木製品の保存処理

出土した木製品は、その多くをセンター保有施設で保存処理を行っているが、製品の素材や木製品の状態により、

センター保有施設での保存処理が困難なものについては、外部委託による保存処理もあわせて実施している。

本年度は2件の遺物について、外部委託による木製品の保存処理を実施した。なお、資料2の漆塗についても、あわせて漆膜分析も行った。

(野崎)

表11 外部委託による保存処理遺物一覧

番号	遺物	調査次	出土墓床	時期	処理法	処理期間
1	動物	鹿田第7次	井戸3	中世	高級アルコール合液	鹿古田生物研究室
2	漆物	鹿田第7次	溝21	中世	高級アルコール合液	鹿古田生物研究室

## 第2節 調査成果の公開・活用

公開・展示活動は、津島キャンパスで定期開催している発掘成果展に加え、鹿田キャンパスにおいても展示会を実施した。また、大学生の博物館実習と中学生職場体験の受け入れを行うなど、教育支援活動にも力を入れた。

### 1. 公開・展示

#### (1) 岡山大学鹿田キャンパス発掘成果展

概要 2005年10月20日（木）～22日（土）の3日間、大学病院南病棟1階フリースペースにおいて、鹿田キャンパス発掘成果展を開催した。鹿田地区における展示会の開催は、2003年度に同所において行った特別展示以



図38 鹿田キャンパスでの展示風景

来2年ぶりである。本展示会では「鹿田遺跡と『鹿田庄』」と題し、鹿田庄推定地である古代・中世の施田遺跡の特色を示すことを目的とした。この展示内容に合わせてセンター報第34号を刊行し、本展示会のパンフレットとして配布した。短期間の開催ではあったが、来場者は344名を数える。往来の多い場所であることに加え、21日の日中にテレビニュースにおいて本展示会が取り上げられたこともあり、終日賑わいが絶えなかった。

**内容** 専門テーマによるコーナーごとに、古代と中世の資料を比較しながら展示を行った。「井戸桟」コーナーでは、古代の井戸桟と中世の方形井戸桟及び曲物を設置した。「井戸のまつり」では、井戸より出土した祭祀用具について、時代的变化がわかるように示した。「古代のうつわ」では、古代の各種のうつわを展示した。「行き交う品々」では、遠隔地から持ち込まれた品々を展示

し、当時の物資流通からみた鹿田遺跡の特色を示した。「文字資料」では、古代における役人の存在を示す文具や墨書きと、中世の供養・まじないなどの木簡資料を展示した。展示方法としては、可能な限り、見るだけではなく実物に触れるができるよう配慮した。新たな試みとして、展示スペースの広さを利用して、実際の造構の大きさが体感できるよう、古代の庭付建物と径約4mの井戸掘り方にに関する寸尺大のプランを復元した「床面展示」コーナーがある。また、展示品に関する理解を助けるため、「映像」コーナーを設置し、パワーポイントのスライドショーによる展示解説映像を流した。

アンケートは89名の方から寄せられた。来場回数をみると、初めての見学者が80%近くにのぼる(図39-1)。これは病院のスタッフの方々や入院患者関係の方々の来場が多数となったためであり、後にのべる津島キャンパスでの展示会において、リピーター見学者が半数以上を占める傾向とは異なる。井戸関係の展示が最も人気が高く、大形で会場内でも目立つ井戸桟が24%、井戸のまつりにかかる品々が18%の支持を得た(同2)。キャンパスの足ともから出土した豊かな資料に対する興味関心はもちろん、映像解説や造構の床面展示にも一定の支持が集まった。寄せられた意見・感想としては、センター職員による説明がなされた点が良かったという声や、継続的な展示会の開催あるいは恒常的な公開への要望が目立った(同3)。

**成果と課題** 鹿田キャンパス内で生まれた調査成果を、現地でかつ実際にキャンパスを利用する方がたに公開できたこと自体が本展示会の大きな成果といえる。津島キャンパスにおける展示会で例年好評を得ている体験の場は、場所の関係もあり設定していない。今後は体験コーナーも含めた企画の検討も有益であろう。また、開催の頻度は、他の業務との関連も考慮する必要があるが、展示会や発掘調査を実施した際の現地説明会等の場で、継続的に成果を公開することによって、文化財への興味・関心を喚起していく必要がある。

## (2) 第9回岡山大学キャンパス発掘成果展

**概要** 鹿田キャンパス発掘成果展終了の後、津島キャンパスの当センターを会場に、第9回目となる岡山大学キャンパス発掘成果展を開催した。展示テーマは、「行き交う人ともの」とし、弥生時代から中世までの人の交

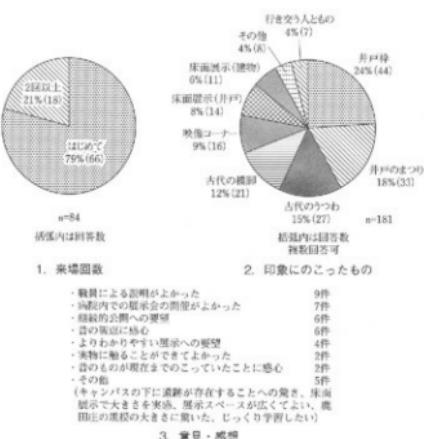


図39 鹿田キャンパス成果展アンケート結果

流や物流を示す考古資料を中心とする展示を行った。期間は、2005年10月26日（木）～30日（日）までの5日間であり、来場者数は175名を数えた。展示期間中には、一般来場者のほか、本学文学部開講講義における見学者もなされた。

**内容** 展示の内容はコーナーごとに分かれている。メインテーマに関連する「行き交う人とのもの」や、鹿田遺跡の古代～中世の井戸を扱った「井戸の世界」、「古代～中世の遊び・芸能」、また「体験」と「映像」のコーナーを設置した。「映像」や「井戸の世界」コーナーなど、先に行なった鹿田キャンパスにおける展示会を活かした部分もあるが、全体として異なるテーマと内容による展示会となるよう配慮した。

「行き交う人とのもの」コーナーでは、弥生時代～古墳時代、中世における遠隔地から構内遺跡にもたらされた遺物を、日本列島の地図上に並べた展示や、木製品を中心に古代～中世の職人に注目した展示などを行った。

毎年好評を得ている体験コーナーでは、「猿形木製品をつくろう！」、「くぐつまわしを探してみよう！」、「赤外線カメラで文字を読もう！」という3つの体験を設けた。今回の体験の中心である「猿形木製品をつくろう！」では、遊びと芸能コーナーにおいて展示した猿形木製品（鹿田遺跡第7次調査出土）に注目し、あらかじめ職員が粘土や木で製作した猿形木製品の模造品に、色付けを行う体験を実施した。

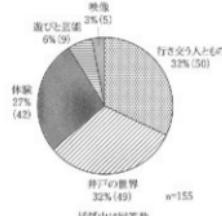
アンケートは59名の方から寄せられた。回答をみると、過去にさかのぼった来場回数については、今がはじめてという人よりもリピーターの数の方が上回る結果となった（図41-1）。アンケートからみた来場回数については、リピーターの増加がこれまで指摘してきたが、本年度はますますその傾向が顕著といえる。

人気のあったコーナーは、メインの「行き交う人とのもの」と「井戸の世界」であった（図2）。また、「体験」コーナーも好評で、中でも猿形木製品の色付けと、赤外線カメラで墨書きを読むコーナーが特に人気であった。「古代～中世の遊び・芸能」の内容が「体験」コーナーに反映されていることを考えれば、展示として取り上げたテーマとしては、全体としていずれも好評であったものといえる。寄せられた意見や感想としては、職員による解説があったことがよかったという感想や、もっと広報活動を充実させてはどうかという意見があった。

**成果と課題** 津島キャンパスにおいては、2000年度以来、毎年定期的に開催がなされている成果展であるが、リピーターの多さに表れているように、継続的活動によって、本展示会は学内外に着実に根付きつつあるといえる。継続性を維持し、展示会をいっそう実りあるものとするために、今後ともアイディアにあふれた展示会を模索するとともに、この活動を広くPRするための方法についてもいっそう検討していく必要がある。



図40 津島キャンパスでの展示風景  
(体験コーナー)



## 2. 資料・施設等の利活用

### (1) 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

#### ①博物館実習

岡山大学文学部において開講されている博物館実習の講義に際して、8月3・5・9日の三日間、当センター

にて実習の受け入れを行った。約30名の受講生を3グループに分け、各グループが一日ずつ実習にあたった。

実習は、埋蔵文化財の調査研究方法に関する知識の習得、センター展示室における構内遺跡に関する学習、木製品の保存処理作業、土器の注記作業からなる。木製品の保存処理作業では、処理前の木製品の計測やサンプリング、PEGの投入を行った。本年度は、発掘調査を実施していなかったため、施設内での実習となったが、限られた時間内で文化財の調査研究を特徴付ける作業を盛り込み、かつ調査研究の全体的過程がわかるよう配慮した。

#### ②中学生の職場体験：高松中学（11月24・25日）、竜操中学（1月31日～2月2日）

中学生の職場体験として、昨年度に引き続き、岡山市立高松中学校及び岡山市立竜操中学校の中学生各3名、計6名を受け入れた。

期間は、高松中学校が11月24・25日の2日間、竜操中学校が1月31日～2月2日の3日間である。

職場体験の内容は、土器注記、土器接合、木製品の保存処理作業、報告書作成にかかる遺物整理、図書移動、考古資料展示室清掃、発掘機材清掃などである。



図42 職場体験

#### (2) 調査・研究への支援

##### ①資料見学・視察

- ・突帯文土器（津島岡大遺跡第3・6・7・15・27次調査）：1件
  - ・石製指輪（津島岡大遺跡第3次調査）：1件
  - ・土鍊（鹿田遺跡第1次調査）：1件
  - ・遺物収藏状況の視察：1件
- ②図書の外部貸し出し： 51件（岡山大学文学部学生ほか）

（光本 順）

### 第3節 2005年度調査研究員の個別研究活動

#### 1. 科学研究費採択状況

岩崎志保：平成17年度科学研究費（基盤研究C）「弥生時代～中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」（研究代表者 山本悦世）：研究分担者

高田貴太：平成17年度科学研究費（若手研究B）「5、6世紀日朝交渉の考古学的研究」：研究代表者

光本 順：平成17年度科学研究費（若手研究B）「弥生時代から古墳時代における刀劍副葬に関する集成的研究」：研究代表者

山本悦世：平成17年度科学研究費（基盤研究C）「弥生時代～中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」：研究代表者

#### 2. 論文・資料報告

高田貴太：「筒形銅器研究の動向と展望」「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」国立歴史民俗博物館

「日本列島5、6世紀の韓半島系遺物からみた韓日交渉」慶北大学校文学博士論文

- 中村大介：「縄文時代から弥生時代開始期における調理方法』『土器研究の視点－弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理－』発表要旨 大手前大学史学研究所  
「岡山平野の突帯文土器の系統と変遷」『津島岡大遺跡17』  
「覆い型野焼きの系譜』『黒斑からみた縄文・弥生上器・土器類の野焼き方法』平成16・17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(研究代表者:小林正史)  
「東アジアにおける紀元前1000年の土器・青銅器研究』『高梨学術奨励基金年報』平成16年度  
高梨学術奨励基金
- 野崎貴博：『津島岡大遺跡17』(編集)  
「縄文時代の水辺利用』『津島岡大遺跡17』
- 光本 順：『堀の構築・使用過程と社会関係』『津島岡大遺跡17』  
「鹿田遺跡第5次調査出土の井戸枠材に関する再検討－焼印と木材の規格－』『紀要2004』
- 山本悦世：『構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析』『紀要2004』

### 3. 研究発表等

- 中村大介：『縄文時代から弥生時代開始期における調理方法』『土器研究の新視点－弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理－』(大手前大学史学研究所)  
The diversity of burials and cultural acceptance. World Archaeological Congress, Inter-Congress Osaka 2006, Osaka Museum of History.  
『弥生時代開始期における副葬品の地域性』考古学研究会岡山5月例会(考古学研究会)
- 光本 順：『分銅形土製品の身体表現に関する型式学的検討－岡山地域の資料をもとに－』日本考古学協会第71回総会  
Toward the Historical Diversity and Current Issues of Gender: a Case Study of Human Figurine *Haniwa* in the Kofun Period in Japan, World Archaeological Congress, Inter-Congress Osaka 2006, Osaka Museum of History.
- 山本悦世：『中・四国における縄文後・晩期の農耕について』西日本縄文文化研究会

### 4. 資料収集・実態調査

- 岩崎志保：縄文・中世遺跡・遺物の実態調査(青森県)、中世資料の調査(鎌倉市)
- 高田貴太：中期古墳群の資料調査(静岡県)
- 中村大介：土器使用痕の資料調査(熊本県、岩手県、新潟県)、青銅器・墳墓の資料調査(朝鮮民主主義人民共和国)
- 野崎貴博：中期古墳の踏査(鹿児島県)
- 光本 順：弥生時代・古墳時代の刀剣及び人物表現に関する資料調査(大坂県、奈良県、長崎県、岡山県)
- 山本悦世：縄文・中世遺跡・遺物の実態調査(青森県)、中世資料の調査(鎌倉市)

## 第4章 2005年度における調査・研究のまとめ

**調査** 2005年度は、発掘調査ならびに試掘・確認調査の実施はなかった。また、小規模工事にともなう立会調査についても、掘削深度の大きいもの、工事区間の狭長な管の埋設工事等は少なく、津島地区、鹿田地区で、ともに1件ずつであった。報告のとおり、いずれの調査においても地形復原に有用なデータを得ることができた。

その他の調査として、旧日本陸軍関連施設である工兵第十八大隊（聯隊）橋梁演習施設の測量調査を実施した。文・法・経済学駐車場の北にのこるレンガ造りの施設は、陸軍上兵第十大隊（聯隊）が橋梁模型を造り、爆破演習を実施したと伝えられるものである。橋梁模型の実測と周辺の測量調査の結果、のこされた施設には古い伝えられてきたような爆破演習の痕跡がみられないこと、橋台・橋脚の特徴から上部構造も含めた橋の構造が推定されたこと、レンガの刻印から生産地が特定できしたことなど、大きな成果が得られた。津島地区にはこのほかにも陸軍関連施設がのこされており、当センターではこれまでにも陸軍関連施設についての記録作業を実施してきたが、これらは年々失われている。今後も施設整備が進められることが予想されるところであり、これらについても何らかの記録を取る必要が生じる場合もあるろう。

**研究** 今年度は報告書『津島岡大遺跡17』を刊行した。これは文化科学系総合研究棟および渡り廊下新館に伴う発掘調査（津島岡大遺跡第23・24次調査）地點の成果であり、縄文～弥生時代の河道・壇構の調査と出土遺物の整理作業から得られた成果を中心に報告している。特に、縄文時代後期の川岸沿いの杭列や、弥生時代前期の堰は、縄文時代の水辺利用のあり方や、弥生時代の初期水稻農耕とそれに伴う灌漑システムの関係をさぐるうえで貴重な事例となった。考察では、縄文時代後期の川岸沿いの杭列の用途、弥生時代前期の堰の構造、突堤土器の型式学的検討の3編を掲載したほか、自然科学的分析として木材の樹種同定、炭化物の放射性炭素年代測定等についても掲載した。その他の刊行物には以下のものがある。「紀要2004」では、津島岡大遺跡、鹿田遺跡の研究として、2編の研究報告を掲載している<sup>46)</sup>。『センター報』は例年通り年2回の刊行でしたが、そのうち1回を古代の鹿田遺跡についての特集号とした。通常のものよりページ数を増し、多様な論点から古代の鹿田遺跡の全体像を描き出すことを目指した。鹿田遺跡については今後も重点的に研究を進めていくこととしている。

**展示・公開** 展示・公開活動のうち、最も注目される成果として、津島地区・鹿田地区の2ヶ所での展示会の開催が挙げられる。この数年来、津島地区での展示会は毎年開催してきたが、鹿田地区での開催は2003年以来、2年ぶりのことである。鹿田地区的職員・学生・利用者に調査成果を還元できたことは大きな成果であった。

その他、この数年米の懸案事項であった出土遺物の収蔵については、敷地内に小プレハブ2棟を設置し、出土遺物以外の物品を収蔵することによって当面の収蔵スペースを確保したが、あくまでも一時的な処置であって、抜本的なものではない。遺物の収蔵については今後も引き続き解決策を検討していく必要があろう。

2005年度は発掘調査が実施されなかつたため、津島地区構内の陸軍関連施設の測量調査を実施することができた。津島地区の塗壁・圓窓に伴い失われていく陸軍関連施設については、記録化によって新たな知見を得られることも多く、考古学的な手法による記録が有効であることが改めて認識された。また、展示会についても鹿田・津島の両地区で開催することができ、充実したものとなった。調査・研究・展示・公開活動とともに例年とは異なる在り方を試み、大きな成果をあげることができた。本センターをめぐる情勢も大きくかわりゆくなかにあって、本センターの活動が広く受け入れられるためには、今後も新たな方向性を模索し、さまざまな試みを通じて、活動の幅を広げていく必要がある。その裏づけとなる調査・研究の質の向上を絶えずはかるため、個々の専任職員のさらなる努力やさまざまな課題への組織的な取り組みが必要となろう。

（野崎）

註 「紀要2004」において詳述しており、ここで内容は繰り返さないが、2005年度の研究成果として掲げておく。

山本悦志「橋内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析」「紀要2004」

光本順「鹿田遺跡第5次調査出土の井戸枠材に関する青検討－焼印と木材の規格－」「紀要2004」

## 付 編

### 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

#### 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

##### (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日〕  
〔岡大規程第93号〕

###### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学部（平成16年岡山大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

###### (目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に關すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保育に關すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に關すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に關する重要な事項。

###### (自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

###### (教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

###### (センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。

###### (副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

###### (調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

###### (調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

## 付編

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に付し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

## (2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

〔平成16年4月1日〕  
学長 敷 定

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に付し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長

三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名

四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人

五 センターの調査研究室長

六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を認め、その意見を聞くことができる。

(事務)

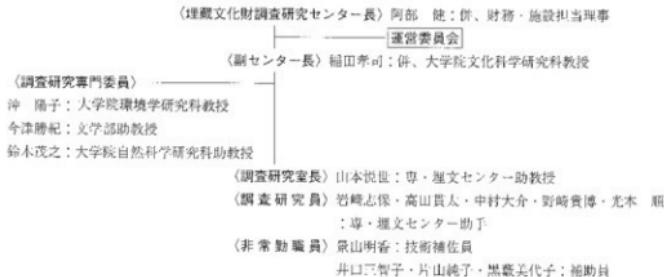
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

## 2. 2005年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

### (1) センター組織一覧



### (2) 運営委員会

#### 【委員】

阿部 健 財務・施設担当理事（センター長）	柴田次大 大学院自然科学研究科教授
福田孝司 大学院文化科学研究科教授（副センター長）	沖 隆子 大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）
新納 聰 文学部教授	山本悦世 埋蔵文化財調査研究センター助教授（調査研究室長）
久野修義 文学部教授	入江良広 施設企画部長
大塚愛二 大学院医歯薬学総合研究科教授	

#### 【2005年度協議・決定事項】

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 第57回2005年 7月25日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>平成16年度決算について</li> <li>平成17年度予算について</li> <li>助手の任期満了について</li> <li>旧陸軍工兵第十大隊橋梁施設演習場跡の測量調査について</li> </ul> |
| 第58回2005年12月 9日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>助手の再任寄金について</li> <li>更衣室改修費の繰越について</li> </ul>  |
| 第59回2006年 1月 6日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>平成18年度予算について</li> <li>平成18年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について</li> </ul>   |

## 3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部長

#### 1. 請負業者が留意すべき事項

- 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
- 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

## II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
  - 1) 安全で機能的な服装にする。
  - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
  - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
  - 4) グライダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
  - 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 潜削
  - 1) のり面の角度  
造成土：通常の土壤の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。  
堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。  
兌柵区の隙間を深さ1.5m以上潜削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
  - 2) のり面の保護  
のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
  - 3) 深い邊堀（深さ1.5m以上の潜削）  
邊堀掘削以外の者が上面で安全確認を行い、「十分な注意を払う」場合によっては周開を広くカットして対応する。  
なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
  - 1) 作業中には安全帯を使用する。
  - 2) 脚台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
  - 3) 2段以上の脚台は、分解して移動させる。
4. 免掲附機械類の操作
  - (ベルトコンベアー・ポンプ等)
    - 1) 溝用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
    - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
    - 3) ベルトコンベアーを承ねたつなぎ日の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
    - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
    - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。
  - (重機関係)
    - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
    - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
    - 3) 積荷中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5. 健康管理
  - 1) 作業中に休憩が進くなった場合は直ちに申し出る。

## III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 溝柵区の状況や造構などの特殊性・必要性等により、上記の2の1) ~ 3) どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

## 付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1960～1982年度）

年度	地 区 名	種別	所属	調 研 名 称	実 施 者 機	面積 (m <sup>2</sup> )	文獻	備 考
1960	鹿 田	立会	肉	岡山県病院跡新設	岡山市教育委員会	8		
津島南	BU26	*	農	香椎古墳新設	*			
津島北		*	文法	合併跡埋蔵施設	*			
津島北		*	文法社	合併跡埋蔵施設	*			
津島市	BD09、BC09 ～11	*		墓神祭備（共同講取付）	*			
津島市	BD～BE04～ 07	*		壁上被扶助改修（瓦木質換設）	*			
1981	鹿 田	*	因例	高気圧遮蔽新設	*			
	*	*	*	動物実験施設新設	岡山市教育委員会	*		大学が市教委への擁護資金の依頼をせざるを得ない。その後、岡山市教委が既存施設等の調査を実施
	*	*	*	防廻解浮体封緘施設新設	岡山市教育委員会			
	*	*	*	運動場改修	*			
	津 島	AV06・10、 AW05・14、 AX06、BD07、 BE10	試掘		日本基幹郵局	*		
津島北	AW14	発掘	文法	排水集中槽（NP-1）埋設	岡山大学	24.0	3	小規模実地調査：津島開拓第1次調査
津島南	試掘	学		石油鉄新設	岡山市教育委員会	2.3		
津島北	AY13・16	*	法經	校舎新設	*	7.0		
鹿 田		*	医	松本松原忍新設	岡山市教育委員会	8.0		
*	*	*	因例	外治歎瘻症新設	岡山市教育委員会	4.0	2	
*	立会	医		消化実験施設開拓排水管・ガス管埋設	岡山市教育委員会	1		
鹿 田	AB～AN22、 AE22～26	*	苗	電線ケーブル埋設	岡山市教育委員会			

## 文献

1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新工事に伴う排水管改修工事に伴う立会調査」『岡山県歴史文化財報告』13 岡山市教育委員会  
2. 河本 道 1983「岡山大学医学部附属病院外周敷地改築に伴う建物調査」『岡山県歴史文化財報告』13 岡山市教育委員会  
3. 古川義重 1985「岡山大学津島池地区小便器（AW3区）の吳服調査」岡山大学構内跡探査発掘調査報告第1号 岡山大学歴史文化財調査室

付表2 2004年度以前の構内主要調査（1983～2004年度）

※例項・統合番号：調査の地区別到着番号（又は番号は選択的に複数）								
津島大遺跡第1次調査に本削除装置貯蔵の構造であることから、統合番号を番号として区別している。								
発掘調査には番号に付いている。								
発掘調査のうち、その他の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には統合番号に（ ）を付している。								
立会調査で、付添に備在する基礎：①中量土層且つを削成した溝渠 ②明暗な堆積・植物を確認した箇所								
・番号：竿底対報告書等								
・文献：付表4～5の番号に対応する。								

付表2-1(1) 発掘調査

〈津島地区：津島大遺跡〉

番 号	年 度	番 号	構 内 在 位	所 属	調 研 名 称	実 施 期 間	面 積 (m <sup>2</sup> )	綱 要	文 獻
* 1	1982	—	AW14	文	小須江貝塚道路（津島大遺跡第1次調査）：排水集中槽（NP-1）埋設	82.10.28～11.24	24	弥生時代中期～古代晩	3
①	1983	11	BE14・18、 BP17・18、 BG14、 BH14・15	農	津島大遺跡第1次調査 ：排水集中槽	84.1.9～3.5	205	弥生時代早～前期聚落	4
②	1983	12	BH13	農	津島大遺跡第2次調査 ：台地環境整理	11.14～11.22	276	弥生時代早～前期水田用灌漑（溝渠）	4
③	1986	2	AV00、 AW00・01	学	津島大遺跡第3次調査 ：男子学寮	12.1～87.6.18、 8.24～9.5	1550	礎文時代後段～弥生時代初期の軒丸柱と溝渠および集落、弥生時代の近代～近代の水田・溝、古代の未だ開拓済	19

## 付録

番号	年度	番号	勝内座標	所属	調査実名	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概要	文献
⑨	1986	3	BF-BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 ：境内測量	87.1.19~1.22	70	弥生時代後期の溝、中根河原	6
⑩	1988	1	AY06~06, AZ06~07	大白	伊勢岡大遺跡第5次調査 ：自然科學研究会	6.27~89.3.19	1537	縄文時代後期～弥生時代中期の町並み と古窯、弥生時代後期～近世の水田開拓遺構	27
⑪	1988	2	AV~AW04~05	工	伊豆岡大遺跡第6次調査 ：文物切出し手作業	9.20~89.5.31	600	縄文時代後期の手作業穴と河原、古代の 車輪遺構、弥生時代初期～近世の水田、 墓	35
⑫	1988	3	AV~AW05~06	T.	津島岡大遺跡第7次調査 ：深根工事探査	10.12~89.3.31	800	縄文時代後期の溝、弥生時代前期～近世の水 田	35
⑬	1990	1	AY~AZ08	大兵	津島岡大遺跡第8次調査 ：自然科學研究会	4.3~4.21	90	古墳時代後期の溝	27
⑭	1991	2	BD18~19	農業	津島岡大遺跡第8次調査 ：道子山駆逐耕作	7.23~12.25	660	銅時代の土塁、弥生時代～近世の落	32
⑮	1991	3	BH13	農・漁	津島岡大遺跡第8次調査 ：（D点）	7.23~12.2	110	弥生時代溝、古代～近世水田	32
⑯	1992	1	AU~AW04	山	津島岡大遺跡第9次調査 ：牛伏櫛切出し手作業	7.1~93.1.29	650	縄文時代後期の町並みと河原、弥生時代 ～近世の水田	47
⑰	1992	2	BD~DC10~11	保	伊勢岡大遺跡第10次調査 ：保護管理センター	93.2.1~3.31, 4.17~7.31	400	弥生時代後期～古墳時代無墳溝、近世耕 作開拓遺構	64
⑱	1993	2	AV~AW11~12	酒	伊勢岡大遺跡第11次調査 ：組合会員参加調査セミナー	9.14~94.1.11	640	縄文後期遺構	36
⑲	1993	3	AV~AW13~14	国	津島岡大遺跡第12次調査 ：四番地	94.2.9~3.31, 4.11~11.30	1472	弥生時代後期腰掛、弥生時代中期～古 墳時代溝、古墳～古墳時代溝	64
⑳	1994	1	AW~AX11~12	事	津島岡大遺跡第13次調査 ：延界原作手作業	10.6~11.30, 95.7.10~10.4	816	縄文時代後期腰掛、弥生時代水田、 谷筋～古墳時代溝、近代作田	41
㉑	1995	2	BB~BC12~13	事	津島岡大遺跡第14次調査 ：探査坑引手作業	10.25~96.2.14	856	弥生時代初期腰掛水田、古墳時代の溝	46
㉒	1995	3	AW00~01	サ	津島岡大遺跡第15次調査 ：サテライティベントチャーピングシステム トラック	96.1.16~4.25	1600	縄文時代腰掛、古墳時代中期～古 墳時代後期腰掛、古墳時代中期～古 墳時代後期水田、古墳～中世水田、溝	38
㉓	1996	2	BD19~20	農業	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験新規	96.5.7~15	30.3	古墳時代腰掛水田、古墳時代中期～古 墳時代後期水田、古墳～中世の溝、古 代の水田	44
㉔	1996	3	AW02~04	風	津島岡大遺跡第17次調査 ：施肥地帯手作業	96.5.21~1.9	1451	縄文時代中期の町並み、弥生時代の溝 と水田、古代の水田	44
㉕	1998	2	BD11	事	津島岡大遺跡第18次調査：石垣施設 （曲）新設と伴う土葺き腰掛取査	98.4.7~4.10	16	古代の溝と古窯	53
㉖	1998	3	AZ09~10	風	津島岡大遺跡第19次調査 ：ニカラギーショコンシャンター	98.7.27~99.2.18	1019	弥生後期腰掛、弥生初期の河原、古 墳時代～中世の溝、近世複層状腰掛、溝	66
㉗	1998	5	AY07	保	津島岡大遺跡第20次調査：松谷（1 期）新設と伴うガソリン噴散取査	98.10.19~28	16	墨色土～黒土に沿る、中世溝	53
㉘	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査：松谷（2 期）シベレーター設置	98.11.6~24	30.2	墨色土～黒土に沿る、中世溝	53
㉙	1998	8	AW02~03	保	津島岡大遺跡第22次調査 ：仮設（日附）	1999.3.1~7.12	773.5	縄文時代中期腰掛、弥生時代早期～中 期腰掛、古墳時代溝、	65
㉚	1999	5	AZ15~RA14	火災	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合防護工程	00.2.3~7.28	1339	縄文後期腰掛、古墳時代中期～古 墳時代後期腰掛、古墳時代中期～古 墳時代後期水田、水田耕作	53
㉛	2000	1	BC~BD14~15	事	津島岡大遺跡第24次調査 ：西丘50周年記念会場	01.3.26~9.30	1350	縄文時代中期腰掛、火葬、弥生初期腰 掛、古墳時代中期～古墳時代後期腰 掛、古墳時代中期～古墳時代後期水田	61
㉜	2001	2	BB~BC14~15	一	津島岡大遺跡第25次調査 ：西丘50周年記念会場	02.2.1~6.24	1648	縄文後期腰掛の溝、弥生時代～古 墳時代の溝、中世の柱穴（柱型灰窓）、 古窯	66
㉝	2002	1	BB~BC14~15	一	津島岡大遺跡第26次調査 ：西丘50周年記念会場	4.30~9.20, 11.28~03.1.15	1798	弥生時代初期の溝、中世～古代の 溝、溝	68
㉞	2002	2	AW~AY06~08	大白	津島岡大遺跡第27次調査 ：自然科學系総合研究会	11.28~03.1.15	1798	弥生時代初期の溝、中世～古代の 溝、溝	71
㉟	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第28次調査 ：古窯	02.9.18~10.3	62.6	古窯～古墳時代の溝、ピット	71

## 〈農田地区：豊田遺跡〉

番号	年度	番号	勝内座標	所属	調査実名	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	概要	文献
①	1983	9	AU~DD28~40	防災	津島跡調査1次調査：外堀設置	7.27~11.22 8.1.8~8.31	2188	弥生時代中期防災～中世築堤	7
②	1983	10	FG~E118~21	防災	津島跡第2次調査：NMR-CI 調	8.1~12.30	126	弥生時代後期～中世築堤	7
③	1986	1	CN~CU27~28, CT~CY19~27, CX~DD19~28, DD~DG22~23	医療	津島跡第3次調査：検査	6.2~11.29	2390	中世の糞坑、古代の河遺と須恵器	10
④	1987	3	DD~DE25, DG~DE27~28	医療	津島跡第4次調査：検査	11.2~11.21	30	古代の河遺	10

組合番号	年度	番号	構内位置	面積	調査実名目	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	性質	文獻
⑨	1987	2	BB - BI125 - 42	風便	鹿田道路第5次発掘：質理桿	10.6~88.3.2 88.3.23~3.31	1192	弥生時代中期後半～中晉の集落	24
⑩	1990	2	BW - CO67 - 71	7	鹿田道路第6次発掘：アイシニア・混合セントラル	11.20~91.6.30	600	弥生～古墳時代の集落、中晉集落	40
⑪	1991	1	-	-	鹿田道路第7次発掘：基礎骨材	-	-	古墳時代初期～中晉の農業、瓦井の水田、墓	39
⑫	1997	4	BB55 - BX61,	区	鹿田道路第8次発掘：E11 治療室	98.2.27~8.6	829	古墳時代～中晉の農業	33
⑬	1998	1	BY56 - BY57 - 57	風便	鹿田道路第8次発掘：E11 治療室	98.7.28~9.1	165	古墳時代～中晉の農業	33
⑭	1998	4	BP - DS30 - 32	風便	鹿田道路第9次発掘：E11 治療室	-	-	古墳時代～中晉の農業	33
⑮	1998	7	CX - CF28 - 37,	風便	鹿田道路第9次発掘：E11 治療室	98.11.27~ 99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中晉～近世墓群	33
⑯	1999	1	CG - CI20 - 37,	風便	鹿田道路第10次発掘：共用便道	-	-	古代の移動（河内内）、系生時代ビックリ、近世溝	56
⑰	1999	3	CD - CE10 - 12,	風便	鹿田道路第11次発掘：共用便道	99.5.7~99.10.14	244.1	古代の移動（水田内）、古代社会遺構、中晉～近世墓群	56
⑱	1999	4	CI - CM19 - 42	風便	鹿田道路第11次発掘：共用便道	99.8.19~12.22	2020	弥生時代水田内町、古代社会遺構、中晉～近世墓群	56
⑲	2000	2	CO - CV35 - 44,	風便	鹿田道路第12次発掘：土方モキヤセセンター	00.10.2~ 01.05.10	1897	弥生時代溝、古墳時代～中晉の墓、五世紀土方	56
⑳	2001	-	CX - CM38 - 41,	風便	鹿田道路第12次発掘：土方モキヤセセンター	-	-	五世紀土方	61
㉑	2002	3	EL - EP45 - 51	大区	鹿田道路第13次発掘：治山研究施設	02.4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の下沿堤溝り、中晉の墓、治山土方跡	71
㉒	2003	1	CD - CM12 - 20	風便	鹿田道路第14次発掘：土方（治山）	03.7.31~12.17	1331	弘生～古墳時代の転造、中晉の井戸、土壙、溝、中晉のため池、土坑	71
㉓	2003	2	EQ - BS45 - 46	大区	鹿田道路第15次発掘：治山研究施設	03.10.16~10.29	30.4	古墳時代初期の月戸・溝、中晉改修	71
㉔	2004	1	AII - AT6 - 7	風便	鹿田道路第16次発掘：治山研究施設	04.10.21~11.8	49.15	古墳～弘生の治山、溝、土壙、中晉の土方	81

## (三郷地区：福呂道路)

組合番号	年度	番号	構内位置	面積	調査実名目	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	性質	文獻
①	1997	1・2	-	田	福田道路第1次発掘：米穀貯蔵庫	97.5.10~20, 7.28~31	269	縄文時代早期～奈良時代中期・中晉～近世墓群	55
②	1997	3	-	田	福田道路第2次発掘：実験研究施設新設	97.11.25~12.5	120	近世・中晉・古代の墓場	55

## 付表2-(2) 確認調査

(津島地区：津島岡大跡)

組合番号	年数	番号	構内位置	面積	調査実名目	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	性質	文獻
(3)	1983	1	BU113	農	全件免耕種予定地	-	2.5	津島岡大第1次発掘：1983年度	1
4	1983	2	BU17	農	排水管中間ポンプ設置予定地	-	3.5	-	1
5	1983	3	農	排水管埋設予定地	-	2.0	-	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次発掘：1983年度	1
6	1983	4	TP22 - 23	農	農場西側新空手水池	2.0~3.0	0.6	2ヶ所、下原川：1987年度工事会合	1
(7)	1983	5	BC - BD13	下	六字寺寺院新空手予定地	2.0~3.0	0.9	2ヶ所、→津島岡大第2次発掘：2000年度	1
(8)	1983	6	BU10	保	保健センター新空手予定地	2.0~3.0	0.8	→津島岡大第6回調査：1999年度	1
9	1983	7	BU16	事	津島寺新空手予定地	0.9	0.9	土器等（1997年度工事会合）	1
10	1983	8	AW05	上	谷合新空手予定地	3.0	1	土器等	1
12	1985	1	PE08	農	穀糞埋設予定地	3.5	1.2	加賀郡など未確認（1996年度工事会合）	5
13	1985	2	AX02	農	研究機関予定地	2.0~3.1	1.2	3ヶ所、純生～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV - AW19 - 01	学	大学学部新空手予定地	2.0~3.0	1	→津島岡大第1回調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BP - BC29	子	屋内廻廊新空手予定地	2.4~1.2~1.7	1.1	→津島岡大第1回調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY - A207	人丸	自然碎石研究持続育養予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	→津島岡大第1回調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02 (ナリ地区)	事	外国人新空手予定地	2.2~2.8	-	純文化～弥生時代～古墳の墓場	8
(23)	1987	5	AV11	社	社会接觸施設センターアジア予定地	2.0~3.0	2	→津島岡大第1回調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	施	身体障害者用エレベーター設置予定地	3.0~3.5	約1.0	中晉・瓦井の墓場、古代・中晉の水田（鍵孔形・筒型）	8
25	1987	7	BD09	教美	身体障害者用エレベーター設置予定地	2.5	0.7	純文化～寝床、純文化・中晉・瓦井土器（鍵孔形で調査）	8
29	1988	17	AX04 - 06, AW01	T	校舎建設予定地	2.0~3.5	-	→津島岡大第6回調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18 - 19	畜舍	動物・飼育施設・遊具予定地	2.5	1.1~1.2	→津島岡大第8回調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中晉・近晉の動物出土（1988年度工事会合）	11
33	1989	2	AZ - BA05	教美	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	純文化～後期～准文化～瓦井の墓場（鍵孔形で調査、面積5m <sup>2</sup> ）	11
34	1989	3	AZ12	大台	介護施設新設予定地	4.0	1.6~2.0	中晉・明治の水田の跡地（1989年度工事会合）	11

番号 番号	年度	名号	構内施設	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献	
35	1989	4	BD02	学	学生会宿泊予定地	2.0~3.2	1	出生時代早~近時の地層(1989年生卒者)	14	
(36)	1989	5	AV-AW13	医	国泰新材乙平定地	3.0	1.4~1.6	→津島岡大第12次調査:1993年度	14	
40	1990	3	DC02	学	学生会宿所シングル宿泊予定地	2.5	1.1	近世時代初期町、中世土器片	18	
41	1990	6	AW-AK11	学	福島県立農業大学校予定地	3.9	1.4~1.6	→津島岡大第13次調査:1994年度	18	
56	1993	3	TR-BF22~23	農	農兵作業用具其他の古物貯蔵室	1.5	-	中~近世作成	30	
65	1994	3	BL20	農業	聯合実験施設	2.0	0.9	GL~1.4mで黒色土、縄文土器1点出土(鹿の上保有)	33	
71	1995	4	BL26	事	因幡交流会館新館予定地	4.1~2.4	1.6	明治~中世の土器堆积、瓦は湿地状態、埴輪・埴輪類(「明法城のみ」)(「土事之合」)	38	
72	1995	5	AW02~03	施	理賃理山宇都郡官	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査:1996年度	38	
73	1995	6	BH07	学	キタシング南北パックス駅跡	3.0	3	標高2.2mで黒色土、竹林~古墳時代の箆2条、六代目1条	38	
(90)	1998	9	AZ09	施	コラボレーションセンター新館に伴う試掘調査	2.7~3.4	1.3	→津島岡大第19次調査:1998年度	33	
(91)	1998	10	AW02~03	施	秋吉(日影)新館に伴う調査	4.5	3	→津島岡大第22次調査:1998年度	33	
92	1998	13	AW04	土	システム工学科新館に伴う調査	2.8	1.0	GL~1.8mで黑色土、縄文土器の出遭	33	
93	1998	14	AC02~03~06~ AV03	事	道路保護区整備に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	5ヵ所、TP1~3~5:標高低地、TP2~4:低湿地地、TP3~4:生牛馬・ピット、TP1~5:中生層	53	
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文部省	松島校舎新館に伴う調査	2.7	3.5	0.8 1.1	→津島岡大第23次調査:1999年度	56
106	1999	7	AV08	土	芦原町新館に伴う調査	1.2	0.2	褐色土丘、表面となる瓦礫層	56	
114	2000	6	AV00、AX00~02~ 03、AZ06、AW08	一	久文~弥生時代における磁化鉄元に伴う調査	2.6~3.2	1.7~0.9	6ヵ所掘削、出土、弥生時代の発掘場、台形等4種類	61	
115	2000	7	DB04	一	則立五十周年記念会館新館に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査:2001年度	62	
129	2002	5	GD05	学	羽根原旧本部練習船館に伴う調査	2.1	-	黑色土の落成後山	73	

## (鹿田地区: 鹿田遺跡)

番号 番号	年度	名号	構内施設	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
(4)	1984	1	BU00~30	医病	西高麗北朝受水槽予定地	1.4	0.5~0.7	中世土器、瓦包帯壁面(盛土保有)	2
(5)	1984	2	C1~C125、 C219~20~23~24	施	西朝初期大字郡松谷新館予定地	2.7	0.8~1.0	→鹿田第3次調査:1986年度	2
6	1985	4	AJ33~41~40~ AJ~AK26	医病	外洋産鹿皮及皮張器工事に伴う施設調査	2.2~3.0	0.9~1.4	出生時代~中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY-D268	ア	アーバイト合組セメント予定地	2.3	1.2~1.3	→鹿田第6次調査:1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎瓦築	2.2	0.9	→鹿田第7次調査:1997年度	50
29	1998	11	CF~CG3~44~ CI25~26、 CK35~36、 CK15	医病	病院新館に伴う調査	2.0~2.4	1.0	→鹿田第9次調査:1998年度	53

## (鹿敷地区)

番号 番号	年度	名号	構内施設	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
1	1990	4	-	医病	医療生物科研究室新設工事に伴う調査	2.5	0.7	中世半山区の土器片	18
2	1996	12	-	医病	バイオ実験施設新設工事に伴う調査	1.5	0.4	改修半山区、遺傳DNA	33

## (三朝地区: 榛沼遺跡)

番号 番号	年度	名号	構内施設	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
3	1997	5~6	-	医	史跡研究新設工事に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	2ヵ所→医第2次調査:1997年度	50
5	2004	1	-	医	二朝宿泊所増設工事に伴う試掘・施設調査	1.3	0.5~0.9	3ヵ所、遺物、遺構、萬葉内古層部	81
6	2004	2	-	医	馬庄塚、也訖城設置工事	1.0	0.85	1ト所、河床段、段落帶	81

## 付表2-③ 立会調査

## (津島岡地区: 津島岡大遺跡)

番号 番号	年度	名号	構内施設	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文献
11	1981	20	HU15~17	事	南院合掌堂跡埋蔵文化財発掘	1.0~2.2	1.0	漢~五代、唐牛・土器・唐瓦器	2
19	1986	12	BB08~09	教	伐木貯留	2.3	1.3	中~近世の漆・漆器	6
20	1986	22	BB08	教	ハンドボールコート跡	0.2~2.0	0.8	因幡土塙跡	6
21	1986	26	BP07~08	医	校舎新設に伴う瓦器発掘	1.8	0.9	中世瓦塙	6
32	1988	17	TG10~11	改善	チースコット・収蔵部明廻設	2.2	1.5	GL~約2mで黒色土、当に約から青瓦を発見	11
37	1989	8	AZ08	人自	自然科学研究科新設:人事室連絡	1.4	-	弥生時代朱漆水井・漆	14
38	1989	10	AI105	工	校舎新設に伴う瓦器発掘	1.9	1.0	鳥居土塙跡	14
42	1990	16	AV04~10	事	岡山市立本町津洋川復興工事上:駐車場設	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヵ所、黒色土、赤瓦・陶器	18
43	1990	20	DC02~04、 DN03~04	事	岡山市立本町津洋川復興工事上:学生会新設排水管設置	2.3	1.2	GL~2.3mで黒色土	18

監督 番号	年度	番号	構内座標	所轄	鋼 砲 名 称	延 長 床 高 (m)	底成土層 (m)	級 要	文獻
46	1991	9	BA16	東・南	防雨屋根上	2.0	0.8	基盤層まで掘削。石極出土	21
47	1991	17	BD16	サ	津島地区瓦斯管敷設(電気) : ハンドホール	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治櫻~淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	サ	津島地区瓦斯管敷設(電気) : アース板	1.7	1.0	GL-1.5mで黑色土	21
49	1991	40	DC・HE-BF12	サ	東北道路新設工事	1.5	-	3ヶ所、GL-1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	東・南	滋賀県瓦斯管敷設ハンドホール設置	1.5	0.75~1.1	鉄文後期層まで掘削、2ヶ所後出	25
53	1992	34	AV12	サ	滋賀県同上瓦斯管敷設	3	1.7	造底土層下は紀土層	25
57	1993	17	BB-PG10~12	保	保育園保育センター新設に伴う外脚上工事 か:電気配線	1.8	0.6~0.7	保育管保育センター:木造棟と同様 黒褐色土はGL 1.15~1.7m、その直 下に基盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保育管保育センター新設に伴う外脚改修:電 気配線	1.1	0.8	弥生・土器層、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区瓦斯管敷設: KII共用利便施設水 処理施設改修工事	3.2	-	明治~中世層、褐色土層、古代 層?、縄文時代土層	30
60	1993	28	BD~BB13	事	津島地区瓦斯管敷設: 北山道路沿水路ボック スカルバート設置	1.5	1.0	近世~中世層を認定	30
61	1993	33	BD-DG12~13	サ	津島地区環境整備: 水源地保護	1.8	0.3~1.2	10ヶ所、近鉄~中世層まで掘削、基 層局所上層を認定	30
62	1993	34	BD-FB12~13	サ	津島地区環境整備: ひだり斜面	1.6	1.0	近鉄から中世層、一部で褐色土層	30
63	1993	39~41	BDGS~07, FCGS~41	学	野球場パッケネット・防球ネット改修	2.0~3.2	1.0	GL 1.2~2.0m 付近で黑色土、以下 は黄色土・青灰色粘土	30
66	1994	9	3D-BE-BF01~07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.95	オーダー掘削 (880cm×深さ10m), GL 1.92~2.0m で黑褐色土	33
67	1994	13	AV10, AW10, AC11	情	連合消防局セントラル蓄電池工事	2.2	1.5	近畿 2箇、中京 (近畿か?) 1箇、 GL-1.7mで黑色土、近畿濃	33
68	1994	20	BD20	施	堆積地	2.2	1.5	GL-1.9mで黑色土	33
70	1994	4	BC18	施	鳥取光映像新館に伴う底廻上取り	2.2	1.9	黒色土付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16~19	基盤	物販光映像新館に伴うハンドホール設置工 事	1.3	-	4ヶ所、底成土層下に5層確認	44
78	1996	12	AV02, AVB3, AV04, AV9c, AW02, AW04	サ	サクライトベンチャーピンクスラボット リ: 新営: 外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ所、明治前 2箇、近畿層 2箇、中 世層 1箇、他 1箇	44
79	1996	13	AV03~AW03	サ	サクライトベンチャーピンクスラボット リ: 新営: 駐輪設置工事	2	0.95	弥生時代まで掘削、古墳時代初期の 遺構・遺物	44
89	1996	18	AV03	保	社会新序字記入筆跡移設工事	2	-	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	保	町議会新宿新築: 泉水料・外構工事	1.3	1.0	遠東JIS下に青灰色粘土質・黃褐色粘 土上: 黄褐色粘土質	44
82	1997	16	BB13~BH13	事	南北道路瓦斯管埋設工事	1.5	-	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~RA13	事	南北道路瓦斯管埋設工事	1.5	-	中世層	50
84	1997	24	BC12	サ	福利厚生施設新設に伴う共同便所新設工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黑色土、古代~近世の 遺構	50
94	1998	15	BA09	サ	津島外灯瓦斯工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黑色土	53
95	1998	22	AZ09, RA09	理	コラボレーションセンター支障瓦斯管敷設工 事	1.4	1.0	GL-1.4mで黑色土	53
96	1998	24	BB12, DC12	サ	市役所街設置工事	1.4	0.95	小浜層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	保	校舎新宮に伴うガス管敷設工事	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	サ	学生会室改装に伴うトラップ側推進工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土層、GL- 2.2mまで青灰色粘土	53
99	1998	35	SA00	事	NTT電話移設工事	1.5	0.9	遠東JIS下に褐色粘土質	53
100	1998	41	AX03~AY07	保	実験排水管設置工事	1.4	0.6~1.4	10ヶ所、5地点まで掘削、2地点で古 代層、1地点で近世層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	保	馬場移設に伴う小木移植	2.2	1.1~1.3	GL-2.0mまで古後・後奈縄、GL-2.2m で鶴見文化層	53
102	1998	44	AV03, AW03	理	校舎新宮に伴う瓦斯管敷設工事	1.97	1.4	古墳時代まで掘削、復興層・土塁層	53
103	1998	48	AW03	保	校舎新宮に伴うガス管敷設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00, AZ01~03	施	構内外灯設置工事	1.15~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黑色土 (GL-0.85~1 m) 確認	56
108	1999	12	AZ08~09	施	コラボレーションセンター・新宮工事に伴う ハンドホール	1.48~2.1	1.03~1.16	2ヶ所、1ヶ所で古跡時代まで掘削	56
109	1999	13	AW02	保	校舎(2階)新宮に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	浜名層 (3m)、黑色土の上まで測定、 近代土層・古代層・縄文後期ビット	56
110	1999	42	AZ09	保	コラボレーションセンター新宮に伴う植木 鉢	1.0~1.2	0.8~1.0	6ヶ所、1ヶ所で黑色土層に応じて掘 削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区瓦斯工事	1.6	1.0	底成土層下に灰褐色粘土層・和葉褐色粘 土層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事: 連宇木本屋敷設置工事	1.3	0.9	底成土層下に灰褐色粘土層・和葉褐色粘 土層	61
118	2000	28	AX10, AY10	保	校舎改修換氣装置工事: 煤氣	0.85~1.60	0.8~1.1	南北側ハンドホールはGL-1.6mまで 中世層検査壁、南北から西方向に向かって止 止	61

## 付録

筋号 番号	年度	番号	構造基準	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造成高さ (m)	性質	文献
119	2000	42	AW06, AX06	土	福島市用化学会社都市ガス改修工事	1.6~2.05	1.45	GL~1.2mで灰褐色土(中層), 1.0	6:
120	2000	44	BA16	大丸	前会社改修電気設備工事	1.5~1.7	1.0	GL~1.4mで赤褐色土、草花土の基 層, 土壌を露頭	61
122	2001	4	AZ10	土	改修電気設備工事	1.6	1.0~1.2	ハンドホール25分で中層 1.0	66
123	2001	11	BH~BC16	事	火葬場監修工事	1.5~2.1	1.2~1.4	2.0m, GL~1.4mで灰色粘土, GL~ 2.1mまで砂か?	66
124	2001	27	RH~DC13	事	芦原鉄道改修工事	0.5~1.6	1.0	2.0m, 土壌まで露頭	66
125	2001	30	DI014	土	本部施設木移地	1.6	0.65~0.8	GL~1.4mに灰色土質土(古代)を 確認	66
126	2002	31	BM14	木	木結構施設改修工事に伴う旧火葬場基礎 伐採	1.05	0.45~0.75	12ヶ所掘削、中性層まで掘削	66
130	2002	29	BH15	土	火葬場改修電気設備工事	1.8	1.0	3~4m, 古代・古墳層まで露頭	71
131	2002	34	BH13~15	事	木結構改修工事: 桁木脚・管路	1.2~2.5	0.7~1.2	次生土と土石・石器がまとまって土壌, 古墳層	71
132	2002	51	BM13	事	木結構改修工事: 施工事: 深水井戸・管路	1.57	0.8	日出層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BH13~BD14	事	本部改修工事の施工: 灰井	0.95~1.9	0.8	2.0mで中性層と古代層まで掘削, GL~1.3mで墨色	71
134	2002	55	BC07~09	被差	一段敷地内側外側改修工事	1.0~1.25	0.95	4~5m, GL~1.5mまで露頭	71
135	2002	57	BH~BC4~15	事	改修工事: 前会社改修工事: 内井跡	1.0~2.3	0.36~1.0	蓝色土, 上層まで露頭	71
136	2003	1	BH13~15	土	改修工事: 前会社改修工事: 作業(?)	1.3	0.7~0.8	小中層まで露頭	71
137	2003	4	AX06	工	新中央火葬場新施設改修工事 (ガス配管工事)	1.4	0.9	古代層? まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	事務室改修電気設備工事	2.43	0.85	GL~1.9mで黑色土, GL~2.1mで純 灰色砂質土	74
139	2003	7	BH~BC18	土	豊島郡合併改修電気設備工事 (復元 能力: 75%引込み壁工事)	1.7	0.7	PH.5m, GL~1.2m 産泥で黑色土 層, GL~1.5~1.6m削除後で純白色 基層を確認	74
140	2003	8	AX06~HA06	土	糞便研究改修工事の施工: 水(雨水排水)	1.7	0.7~0.8	林系3~3.4mで黑色土, 地下~内 心の底層濃多色, 表土: 古代の表土 層, 道路等	74
141	2003	14	AW~AX06_07	工	糞便研究改修工事の電気設備工事(外構)	1.4	—	小中層まで露頭	74
142	2003	15	AW~AX06_07	工	糞便研究改修工事の施工: 構造(?)	0.3~2.5	1.6	地下構造物等まで掘削した箇所あ り, 古代構造	74
143	2003	17	DC~BH15	事	旧市役所改修工事: 水(雨水排水)	2.70	1.1	地で, 純灰色砂質土	74
144	2003	21~1	PG~TRH13	事	公共下水接続工事 No.1区間 浴場会所 施設	1.8	0.9	同上	74
145	2003	21~2	BE~PG10	事	公共下水接続工事 No.2区間 体育館の東 ~武道場	1.95~2.25	0.8~0.9	向て漢文名跡等, 表面で草生・消滅 まで露頭, 表生土・礫土状地帯	74
146	2003	21~4	AZ16	事	公共下水接続工事 No.4区間 文・社 教の西	2.45	1.5	碑文系露頭等で消滅, 野生灌木等	74
147	2003	21~5	BA10	事	公共下水接続工事 No.5区間 理学館	1.9	0.7	中生層の壁面に瓦礫等	74
148	2003	21~6	TG22	事	公共下水接続工事 No.6区間 葵学園4 号施設	1.5~1.9	0.9~1.4	瓦礫等盛溝等で露頭, 先生・苟利初 ビット, 古代柱跡遺構確認	74
149	2003	21~7	BT16	事	公共下水接続工事 No.7区間 津島宿泊 所	1.15~1.3	0.8	小中層まで露頭	74
150	2003	21~8	BT15	事	公共下水接続工事 No.8区間 宿泊所	2.0~2.45	1.3	純灰色砂質土で露頭	74
151	2004	1	BD~HU06	事	公共下水接続工事: 留学生等宿泊施設	1.22~1.68	1.0	中生層まで露頭	81
152	2004	6	BH9~10	事	津島キャンパス用地整備 留学生センター 西	0.5~1.15	0.4~0.6	等生跡包帯等, 遺構, 碑塔確認	81

## (鹿田地区: 鹿田遺跡)

筋号 番号	年度	番号	構造基準	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造成高さ (m)	性質	文献
3	1983	23	AO~AW22	汚染	外堀改修監視監査権	1.3	—	次の時代技術土: 分割細土風化, 肌 岩化	1
7	1985	6	AW~BH 23~ BH~BD24	汚染	分離改修監視外堀水質改修	1.3~1.7	0.7~1.5	中生・底生の風化・腐物	5
8	1985	12	AGH1, AGH2, AF 23	汚染	苔原改修監視工事: 煙灰配施ハンド ヘル探査	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中生・粘土層・ビット	5
9	1986	9	BI~HN4	汚染	糞便改修監視外堀改修工事	0.8~1.3	0.8	中生・粘土層	6
11	1986	24	CE~CH12, CH~CX13, CX~DA14	汚染	埋没及び開闢工事	2	0.8~1.0	中生・粘土層	6
14	1987	8	TC07	汚染	糞便改修監視工事: 外堀基礎	2.5	—	次の時代監査権・遺構確認	8
15	1989	46	CJ~CR43, CL~CS29	汚染	糞便改修監視工事: 外堀基礎	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中生層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	ゾイツ・ゼンタール: 灰水池・漱水池	1.4~1.5	0.9	中生層1条	25
19	1992	42	CT13	ア	テニスコ・新築監査	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DR60~62	監査	糞便改修工事	1.5	0.8	糞便層以下はすべて遺構層との可能 性あり、第3・4・5・6・7・8・9基	33
21	1995	11	PG~TH18	汚染	鹿田地区糞便監査: 病院改修跡新成	1.5	1.0	糞便土以下に粘土風化・青灰土粘土層 等物なし	38

付表

件号 登録 番号	年度	番号	構内 座標	所属	調査名 称	掘削 深 度 (m)	造成土 厚 (m)	概 要	文献
22	1995	14	CT07・08	医療	施設地区地盤整備；直角タンク設置工事	2.3	1.0	中世2重環濠、溝3条、溝内から中古～古代の土器類出土。	38
23	1995	17	CD08～CC11	医療	東山地区地盤整備；用賀病院直角タンク工事	1.23	0.85	治承環濠跡、中世土器類出土。工事基壇などで区段化する1/2杜尻には鐵器	38
24	1995	23	DY56～67	医療	直角ネット取扱工事	3	0.8	（約60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器片・石器片14、周辺在土器有り、GL～2m迄に12箇所発見）	38
30	1998	36	BV73, CN78	医療	投合施設に伴う仮設支柱工事	1.2	1.0	中世層まで解剖	53
33	1999	15	HV65～71	医療	新規施設に伴う假排水・路路	1.2～1.4	0.9	中世層まで解剖	56
34	1999	18	B45～	医療	新規施設に伴う假排水	2.2	1.1	西端8.2m、古墳層、中世層、ピット3ヶ所、中世層まで解剖、層底不明の実際	56
35	1999	27	HY42～43, B43～44	医療	基盤整備（瓦気密設）；地中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	（約18m、施設11次調査区北側部分で中世ピット発達）	56
36	1999	41	CF21～26, CF～CL8, CD～CP28～33	医療	病院新設に伴う古墳群解体	1.7	—	（約18m、施設11次調査区北側部分で中世ピット発達）	56
37	1999	46	CN48～D24	医療	明神新宮に伴う汚水井・貯槽	2.3	1.2	平安時代の井戸1基、二井1基、中世諸寺	56
38	1999	47	CM～CN～CP～CR～ CT18～CV～DA～ DC～DD～DV59	医療	グラウンド防護ネットボール	2.0～2.3	—	11ヶ所、南西6ヶ所は河岸、7～10ヶ所付近は古墳地、西北端は河岸	56
39	1999	58	BT59	医療	病院新宮に伴う西排水沟	2	1	古成土以下7層確認、古墳時代層まで解剖	56
41	2000	25	CD41～CN45	医療	病院新宮その他のT.P.・路路・雨水井	1.6～1.8	—	（約18m、古白土層、洪積物砂質土層・地盤改良土層と確認、復元地帯）	61
42	2000	26	CN5～21～27, C03～42, TS45, DV45	医療	電柱及び街灯の設置工事	3.6	—	7ヶ所、原白土層、洪積物砂質土層・地盤改良土層と確認、復元地帯	61
43	2000	29	DT27	医療	排水管ガス配管切り離し用バタフ取手工事	0.8～1.13	0.7	GL 0.85mで黄褐色地質出現	61
44	2000	47	DG～DJ38～67	医療	原木山地区雨水沟設置改修	2.1～2.3	1.3～1.5	橋梁20mの堅固構造、古代の遺構・河岸帯	61
45	2001	37	BR～CA43、CA 43～50、CA44～ CA45, DR～CA55	医療	合併教育研究施設施設文化財発見調査に伴う 假排水設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土した地点あり。	66
47	2002	10	CH11～CN22	医療	野川地区ガス・青磚設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで解剖	71
48	2002	19	BT～BU11	医療	地盤用地盤ガス配管設工事	0.5～1.8	—	2ヶ所、GL～1.25mまで解剖した地点で中世土器は古代の遺構	71
49	2002	22	CQ41～42	医療	エヌルギーセンター新設新宮その他の工事	1.5	—	1ヶ所、古墳層まで解剖	71
50	2002	25	CG41, CO34, CP45, CX38	医療	エヌルギーセンター新設新宮その他の工事 「外構」	1.47～1.66	—	4ヶ所、中世層まで解剖	71
51	2002	27	CN36～45	医療	エヌルギーセンター新設新宮その他の工事 「外構」	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・滑	71
52	2002	36	BL～BS45～53	医療	施設教育研究施設新宮その他の工事	1.65～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで解剖	71
53	2002	52	DO67	事務	本館新宮その他の工事：假排水設置	1.25	—	中世層	71
54	2002	56	IG518	医療	田舎合病院リースアパート工事	1.68	—	原層で外生・古墳層、上層小穴	71
55	2003	5	DA～B245,C045	医療	施設教育研究施設新宮その他の工事（無井筒排水）	1.7	0.7～1.0	（約18m、古白土層・地盤改良土層と確認、中世ピットと解説）	74
56	2003	9	BL～BS56～53	医療	社会教育研究施設外構工事（泥水・瓦井・廃 油井）	0.8～1.75	0.7～0.9	（約18m、古白土層・地盤改良土層と確認）	74
57	2003	10	BP～BS59～54	医療	社会教育研究施設給排水配管改修工事	1.33	0.8	（約18m、古白土層・地盤改良土層と確認）	74
58	2003	13	BL53, BL54	医療	合併教育研究施設外構工事（外構）	1.4	0.8	中世層まで解剖	74
60	2004	3	AF16, AF～ AJ17, AJ9～16	医療	所構内構造ガス管設置工事	1.0～1.9m	0.7～0.8	（約18m、古白土層・地盤改良土層と確認、中世ピットと解説）	81
61	2004	5	AE4～16, AF～ AI16, AF9～15, AJ1～AO9	医療	医療構内支障給排水配管改修T.P.	0.9～1.9m	0.85	（約18m、古白土層の河床と推定される谷底を確認）	81

## 〈東山地区〉

件号 登録 番号	年度	番号	構内 座標	所属	調査名 称	掘削 深 度 (m)	造成土 厚 (m)	概 要	文献
1	1983	13	—	教育	昭和中学改築工事	4.0～5.0	—	シント層中	3
2	1997	29	—	教育	昭和小・中学校改築改修改修工事	1.2	0.79	GL～1.1mで近世木構造、溝1条	50

## 〈三朝地区：福島道路〉

件号 登録 番号	年度	番号	構内 座標	所属	調査名 称	掘削 深 度 (m)	造成土 厚 (m)	概 要	文献
4	1997	18	—	測量	実験研究施設に伴う電気測量装置工事	1.0	—	GL～1.0mで中世包含層に至る可能性	50
								上部	

付表3 墓藏文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2004年度現在）

所蔵 施設	種類	開拓名・地区名	件数（1件：約30リットル）						備考 (主要な構成・有形遺物)	文献	
			総数	土器	石器	木器*	漆器*	その他	ゾンブル*		
岡山 発掘		黒田第1次調査（井原新那屋跡）	598	480	13.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中世、近世、本納冠甲、人面彌子玉、貝、ガラス容器	7
*	*	黒田第2次調査（EMR-C1層）	18.9	94	0.4	20	0.5			弥生後期～中世、井原、木彌子	*
施設	*	黒田第3次調査（EMR-C2層）	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世、石器	10
*	*	黒田第4次調査（EMR-C3層）	3.5	2	0.3		0.2		1	古代～彌子器	*
岡山 発掘	*	黒田第5次調査（吉野博）	130	87	2.3	20	1.5		19	弥生中期～中世	24
ア	*	黒田第6次調査	62	39	0.5	1	1.5			中世、青銅製鏡	40
医	*	（アーチィクワ・地合セントー）									
医	*	黒田第7次調査（吉野医学館）	81	66		10		1	4	弥生～近世、吉野本納品	53
医	*	黒田第8次調査（吉野医学館）	8	8						弥生～中世	53
医	*	黒田第9次調査（吉野1層）	130.1	96	0.1	13	9	2	弥生～近世、本納3点	56	
医	*	黒田第10次調査（吉野2層）	2	2						古代～近世	56
医	*	黒田第11次調査（吉野1層）	74	66		4		2	弥生～近世、本納1点	56	
医	*	黒田第12次調査									
医	*	（エヌカーセンター）	147	77	1	54			15	弥生～近世、縄	61
医	*	黒田第13次調査（吉野教育研究会）	254	211	5	10			28	弥生～近世	71
医	*	黒田第14次調査（吉野本納）	66	54		3			9	中世～近世	74
医	*	黒田第15次調査								古墳時代、中世	74
大西	*	黒田第16次調査	1	1						弥生～近世	81
企	*	（吉野本納村エレベーター地）									
企	*	（吉野本納村研究会）	3	0.5	0.2	4				弥生中期～古代	3
企	*	（吉野本納村研究会・配合）	17.5	12	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	*	吉野大第3次調査（男子学生会）	67	49	1.5	2	4.5				
*	*	吉野大第4次調査（室内洗糞場）	1	1						縄文後期～古墳時代、古代～近世 石指輪、轮廓式土器片	19
大河	*	吉野大第5次調査	82	68	3	1	8			弥生早期～弥生前中期 (火葬骨灰盒を含む)	6
上	*	吉野大第6次調査	49	33	1	9	6			縄文後期～古墳、古代～近世、耳环、木製軸（勾文）、瑟楽盤	27
上	*	吉野大第7次調査	31.5	10	0.5	1				縄文後期～近世、人形土器、アンペラ、人形土器	33
上	*	吉野大第8次調査	11.5	10	0.5						
工	*	吉野大第9次調査	50.5	30	2.5	3					
企	*	吉野大第10次調査	87	78		7			2	弥生前中期～近世	66
*	*	吉野大第11次調査（吉野本納）	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
*	*	吉野大第12次調査（吉野本納）	35	24	1	20			10	縄文後期～近世	65
*	*	吉野大第13次調査（吉野本納）	12.5	12	0.5					縄文後期～古墳前中期、中世	41
*	*	吉野大第14次調査（吉野本納）	13	12					1	弥生～古墳	46
*	*	吉野大第15次調査（サテライトベンチャーリミテッドネオクラシカル）	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期、弥生早期 墓具、アンペラ、整地盤	72
高瀬	*	吉野大第16次調査（動物実験室）	0.3	0.3						縄文後期、弥生～中世	44
穀	*	吉野大第17次調査	86	62	11				12	縄文後期～近世	77
企	*	吉野大第18次調査（山陽）	1	1						縄文後期～近世	33
穀	*	吉野大第19次調査（吉野本納）	31	21	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
穀	*	吉野大第20次調査（吉野本納）	1	1						縄文後期～近世	33
工	*	吉野大第21次調査（吉野本納）	7	6	2					縄文中期～近世	64
穀	*	吉野大第22次調査（吉野本納）	37	26	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代埋作物、竹筒物	77
文法社	*	吉野大第23次調査（吉野本納）	90.5	20	0.5	2	2		8	縄文後期～古墳、枕（縄文）石器	80
文法社	*	吉野大第24次調査（吉野本納）	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世、枕（縄文）	80
農	*	吉野大第25次調査（吉野本納）	0.3	0.1						中、近世	61
学	*	吉野大第26次調査（吉野本納）	33	17		5		1	10	縄文後期～近世	76
春	*	吉野大第27次調査（吉野本納）	15	14	1					縄文後期～近世	68
工	*	吉野大第28次調査（吉野本納）	17	15	2					縄文後期～近世	71

所属	種類	調査名・地区名	箱数（1箱：約90リットル）					備考 (主張時期・特徴)	文献	
			箱数	土器	石器	木器*	种子*	その他		
農	実地	津島河内遺跡第2次調査 (農学部共同調査)	2.1	2	0.1				縄文後期～近世	71
田	*	津島河内第1次調査(実験研究会)	9	8				1	縄文早期～弥生中期・中世	35
園	*	橋山遺跡第2次調査 (実験研究会スローグ)	2.1	2			0.1		中世～近世	55
区划	試掘 確認	西田(莊寺)	1	1					弥生～中世	5
学生	*	津島北(男子学生寮)	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	*
大正	*	(自然科學研究会井原)	1	1					縄文後期～弥生前期	6
事務	*	北島生土(外国人宿舎)	1	1					縄文～中世	8
理	*	津島北(脊神石用ヒレベーター)	0.3	0.3					中・近世	*
教説	*	津島門(=)	0.7	0.7					縄文・中世	*
上	*	津島北(校舎)	1	1					縄文～近世	11
産業	*	津島市(動物・遺伝子交換施設)	0.7	0.7					縄文・弘生・中・近世	*
事	*	津島市(国際交流会館)	0.3	0.3					中世	*
人白	*	津島北(合宿施設)	0.2	0.2					中・近世	14
学校	*	津島市(学生会宿舎)	0.4	0.2			0.2		中世	*
教育	*	津島北(自然資源用ヒレベーター)	0.3	0.3					縄文	*
同	*	(浴場施設)	0.8	0.8					古墳～中世	*
学生	*	津島南(学生会宿舎ポンプ室)	0.6	0.4					縄文～中世	18
養生	*	食育(資源生物利用研究所)	0.1	0.1					近世	*
ア	*	鹿島(アインドア・総合センター)	1	1					中世～近世	*
事	*	津島北(福井町立施設)	0.5	0.5					弥生？～中世	33
農	*	津島西(動物実験施設)	0.1	0.1					縄文？～近世	53
施	*	津島北(織機工場)	0.1	0.1					—	53
上	*	津島北(システム工学科棟)	0.1	0.1					—	53
会	立会	83年度	2	2					分鏡別土瓦器	1
*	*	84年度	1	1					—	2
*	*	85年度	1	1					—	3
*	*	86年度	0.5	0.5					—	6
*	*	87年度	0.5	0.5					—	8
分布	28年度	二朝・本荘	0.3	0.3					—	14
全	立会	91年度・92年度	0.3	0.3					—	21・25
*	*	93年度～99年度	0.8	0.8					—	30・33 38・44 50・53 56
*	*	00年度	3	3					—	61
*	*	02年度	8.5	2.5	6				弥生早期～後・中世・縄文	71
*	*	03年度	2	2					—	74
*	*	04年度	1	1					—	81
*	*	05年度	1.1	0.1			1		木製器	
総	箱 数		2723.5	1933.4	76.6	425.2	25	17.1	246.2	

\* 木製・骨器・サンゴの箱抜け、資料整理が並んでいて状況が複雑となるため、各々箱数の変動が大きい。  
文献は付表4～5の番号に対応する。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小楊法目累通跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集		1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告II (農学部構内 BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

\* 大字：発掘調査報告書

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2006年3月まで)

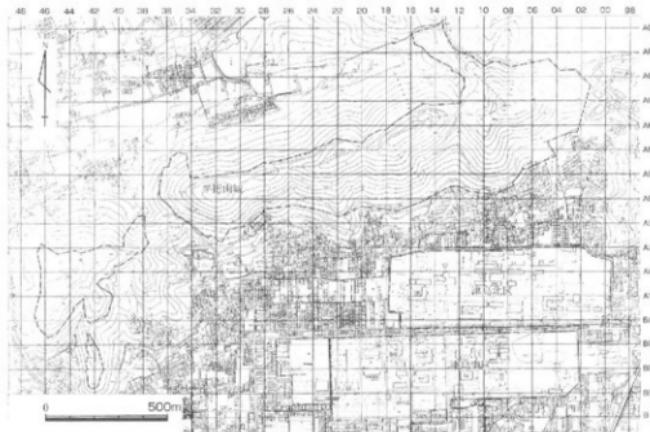
番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊		1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号		1988年10月
10	鹿田遺跡 II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊		1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月

番号	名 称	発行年月日
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内道路調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1995年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月

番号	名 称	発行年月日
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月

\* 太字：発掘調査報告書

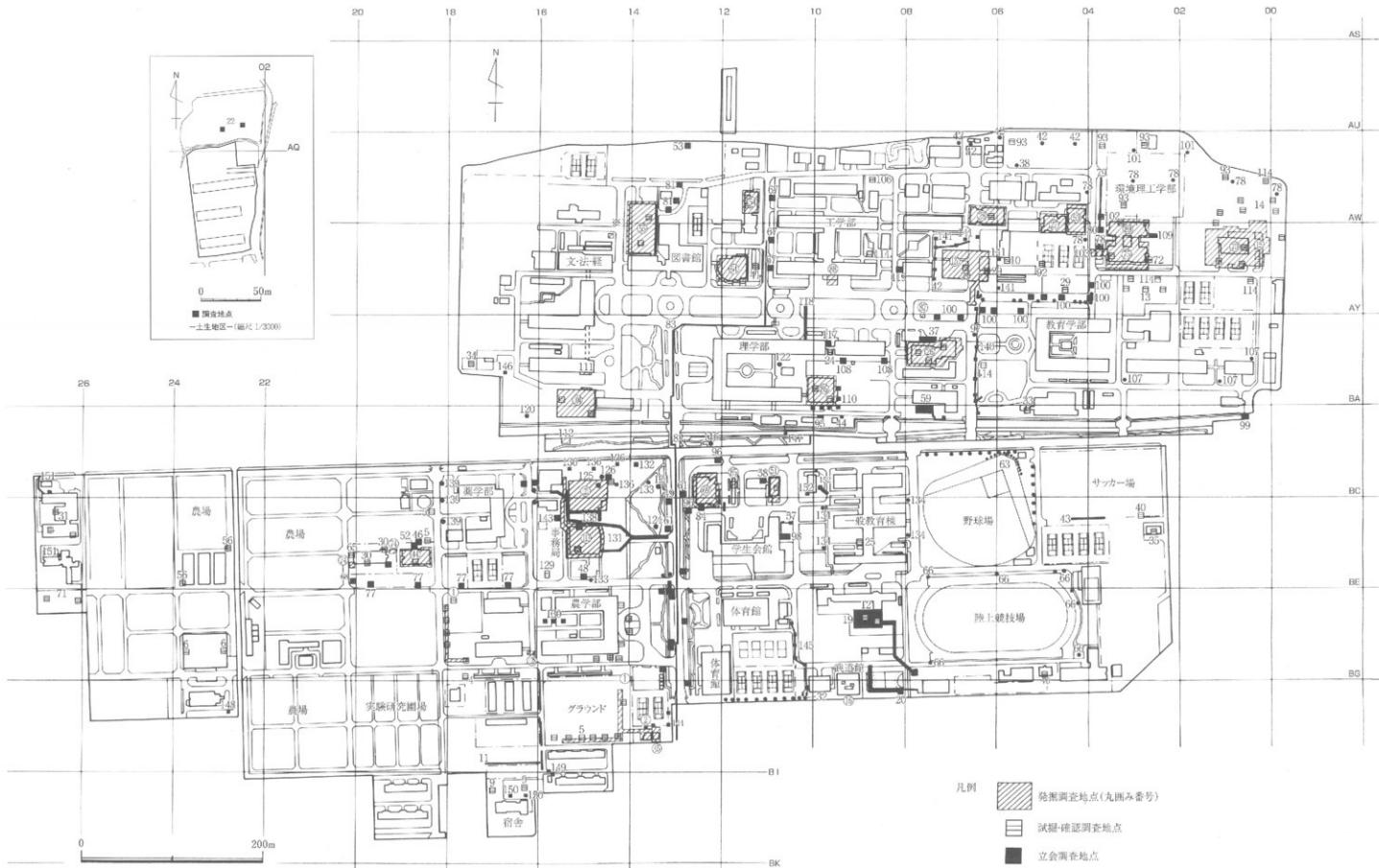
## 付 図



付図1 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)



付図

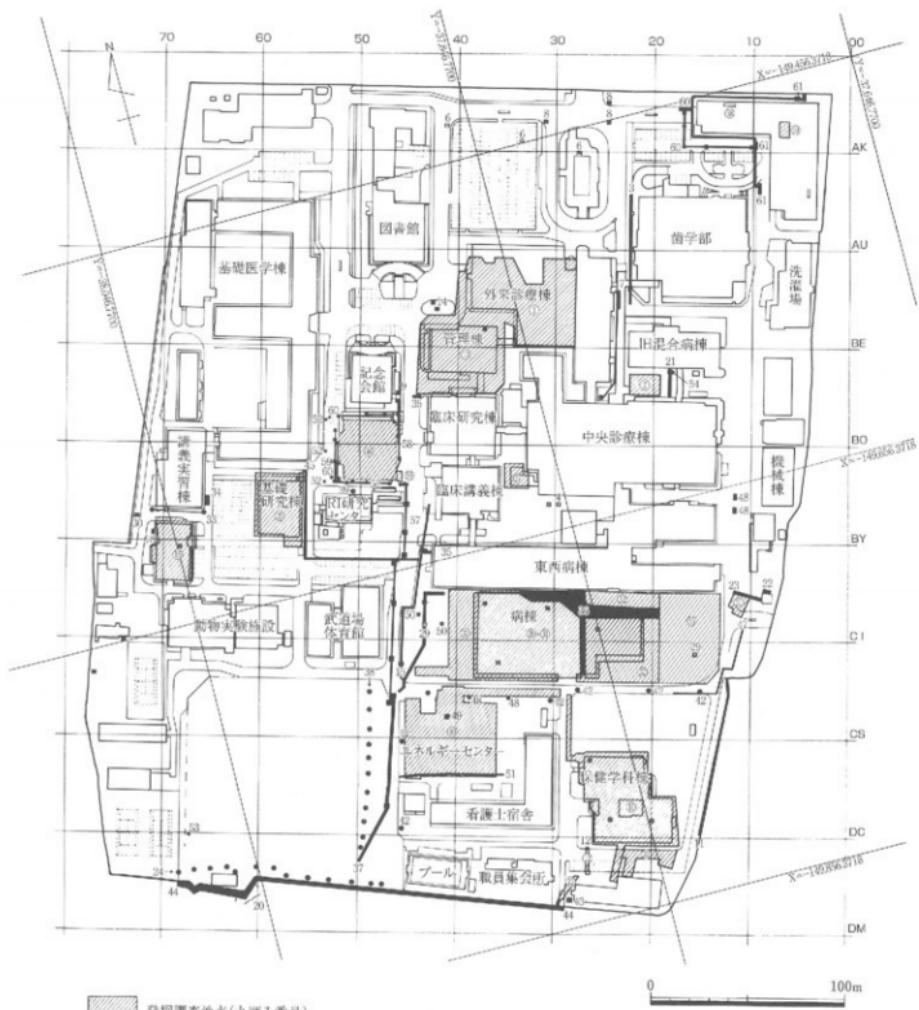


付図2 2004年度までの調査地点【1】一津島地区ー (縮尺1/4000)

凡例

- 発掘調査点 (丸込み番号)
- 試掘・確認調査点
- 立会調査点

番号は付表2の総合番号に対応する



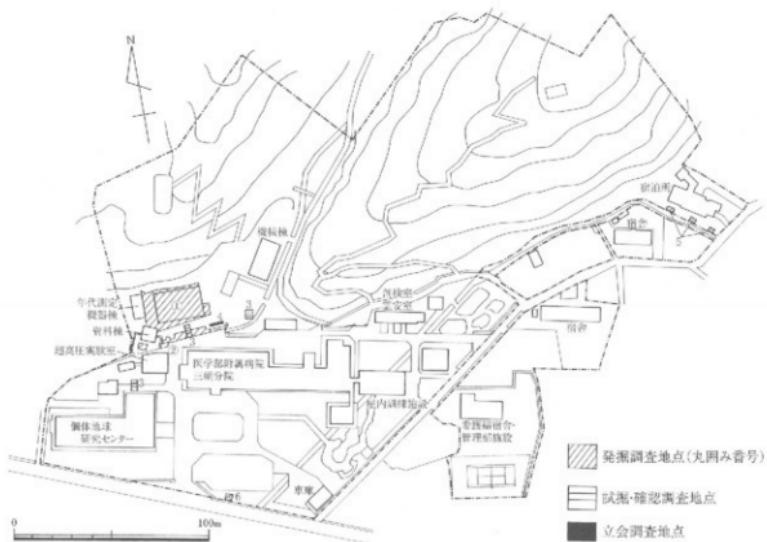
■ 発掘調査地点(丸込み番号)

△ 試掘・確認調査地点

■ ● 立会調査地点

\*番号は付表2の総合番号に対応する。

付図3 2004年度までの調査地点【2】—鹿田地区— (縮尺 1/2500)



付図4 2004年度までの調査地点【3】—三朝地区—（縮尺1/2500）



付図5 2004年度までの調査地点【4】—東山地区—（縮尺1/4000）



付図6 2004年度までの調査地点【5】—倉敷地区—（縮尺1/4000）

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

---

2007年3月14日 発行  
2007年3月14日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要  
2005

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市津島中三丁目1番1号  
(086) 251-7290  
印刷 友野印刷株式会社

---



BULLETIN of  
Archaeological Research Center  
Okayama University  
2005

Archaeological Research Center, Okayama University  
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>